付　編　２

１　佐藤傳藏　1899「九州に於ける石器時代人民」『地学雑誌』11 巻１号　東京地学協会

２　鈴木文太郎　1918「河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊

３　濱田耕作・榊原政職・清野謙次　1920「肥後轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊（濱田耕作・榊原政職「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」，清野謙次「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」を収録）

※　上記１～３の本文は，旧字を新字に改めた（人名を除く）。なお，２・３の挿図及び図版は，京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」のデジタルデータを使用した。

1　九州に於ける石器時代人民

理学士　佐藤　傳藏

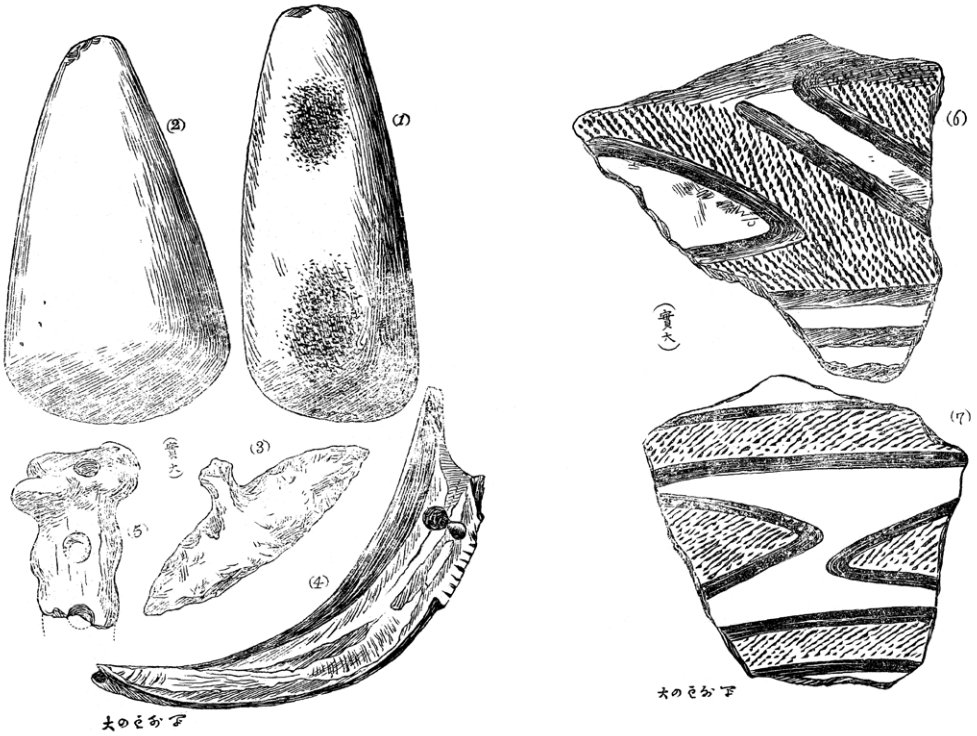
九州に石器土器を遺したる人民は，関東奥羽地方に石器土器を遺したる人民と同しきものなるか，抑亦相異なる者なる乎，是れ日本の先史人類に関する極めて重要なる問題なり。薩南諸島に於ては夥多の石器を出すが，関東及奥羽地方より多く出す処の土器は，全く之を出さすと言ふも可なるべし，然らは関東及奥羽地方に於て，石器と共に土器を遺したる処のものは，九州の薩南諸島に於て石器のみを遺したるものとは相異なるものなる乎，関東奥羽地方に於て石器及土器を共に製造使用したる者と，薩南諸島に於て主として石器を製造使用したる者とは，同一の人種なるか，之れ吾人の知らんと欲する所なり。

我日本の各地方より出す石器時代の遺物には，自ら多少の地方的分布の其間に存するものゝ如し，一般に石器は北は北海道より，南は台湾に至る迄，諸地方に於て之を発見するも，土器は此の如く普く行き渡れりと云ふを得す，奥羽関東地方よりは石器と共に多くの土器を出すも，中国に至れは土器は甚た乏し，薩南諸島に至れは殆んと全く土器を出さすと云て不可なかるべし，石器も其間に地方的分布ありて，北海道よりは石鏃の立派なるもの，石斧の立派なるもの，石槍の立派なるものを出すが，彼の石棒なるものに至ては稀なり，之に反し北海道に極めて接近せる奥羽地方は，石棒，石剣の精巧なるものを多く出す，又た石匙（俗に天狗の飯匕（めしかい）と称す）と称する者は，奥羽地方には沢山見出さるゝも関東地方に於ては比較的少なく，九州に至りては割合に多く出すか如し，此の如く我国諸地方より出す石器時代の遺物には，多少の地理的分布あるが，是れ果して偶然の起り事か，抑も亦其間に一種の意味の存するものにや。

九州と奥羽若くは九州と関東と云へは，既に地理的距離に於て甚しく相距れるが，此等諸地方に於て石器土器を遺したる人民の棲息せる時代に於ける事は第二の問題として，其人種は果して同一なりや，将た亦相異なれりや，是れ余の述べんと欲する所なり。

従来石器時代の遺跡に関し，九州の事情は甚た不明の中に葬られ居りたり，余は昨夏仲仙道，東海道，山陽道等を経て九州に至り，肥後の二三の石器時代遺跡を踏査するの機を得たり，素とより調へ尽したりといふを得さるも，採集したる品物に就て一二の説明をなし，此等の遺物を製造使用したる人民に就き，聊か意見を述へんとす。

石匙は奥羽地方に甚た多く，何くの遺跡に行くも直ちに見出さるゝが，常陸武蔵辺の遺跡に行くも容易に之を得ること能はす，然れとも九州に行けは比較的多しとす，一般に九州の貝塚は貝殻の多量なる割合に，其内に含有せらるゝ遺物は甚た少なし，近比発見せられたる彼の石器時代遺物発見地名表にも載り居らさる遺跡は，肥後の国宇土郡轟村に在り，轟村は熊本市の南三里余の所に在り，清水の湧出する所なれは，熊本市街の人士は納涼に行くこと甚た多し，其側に一大塚あり，現今の切断面を見るに，上部は之を覆ふの土は殆んと無く，貝殻を露出し，其厚さ殆と六尺に達す，貝の種類は，かき，あかゞひ，はまぐり等にして関東地方の貝塚と別段異なることなし，其介殻の多量なる昨年より今日に至るまて，尚石灰を取る為めに貝を焼きつゝありて，此後も尚此石灰業を永続するの見込ある程なり，此の如く貝殻の分量は多量なるも，其割合には土器石器の分量少なく，彼の椎塚（常陸）より介殻と共に沢山の遺物を出すか如きことなし余は暫時此貝塚を穿鑿したる後，漸くにして土器の破片若干を採集したるが，石器も亦同様に少なし，然れとも其種類及び土器の模様に至ては甚た面白きものあり，（第六図）石器としては石斧石鏃の外に関東地方に少なき石匙を出すなり，又合志郡黒石村の遺跡よりも見事なる石匙を出せり（第三図）併し其形ち奥羽地方の者と少しく異なれり，奥羽には扇形の者多きも，此轟村及黒石村より出せるものは多少横に長し，然とも決して之を製造使用したる人種の異なる証となす如き甚しき差異にあらす。又土器の模様に於ても関東地方より出す



者と，全く同一の者あり，第六図は轟村の貝塚より余か採集せるもの，之を第七図に示す常陸国椎塚より出たるものと相対照せよ，吾人は其間に些少の差をも見出す能はさるなり，されは関東地方に石器土器を残したる人民と，九州肥後に石器土器を遺したる所の人民とは，其趣味好悪を同ふせりしと云ふを得べく，彼等は全く同一人種なれりと云ふを得べし，製作に至りても，人稍もすれば其甚しく粗雑なりと説く者あり，然れとも間には中々に精巧なるものあり，決して欧羅巴の所謂新石器時代の者にも劣らざる者あり，第一図及ひ第二図に示す所の石斧は，合志郡御満田村より出せるもの，共に其製作の巧妙なる，奥羽地方より出せる者と云ふも決して差支なき位なり，されば若し単に品物の精巧なるを以て，之を製造使用したる所の人民は発達したるものと云ふを得ば，九州に於ける石器時代人民は，誠に好く発達したるものと云はさる可からす，肥後八代郡大野村の遺跡よりは，石斧の両頭は刃のあるものを出し，恰も北海道より出たる者と区別する能はさる程なり，土器は薩南諸島よりは之を出さす，中国は甚た乏しく，関東に至りて頗る多く奥羽に至りて最も精巧のものあり，今採集せる二三のものを見るに，常陸或は三崎（相州）より出すものと，殆んと全く同しきものあり，故に肥後に石器土器を遺せし人民は，関東及奥羽地方に石器土器を遺せし人民と同一なりといふを得へし，此外肥後よりは骨器の精巧なるものを出せり，（第五図）穴の穿ち方磨き方の如き仲々に巧みなり，又猪の牙に彫刻を施したるもの大野村より出せり，（第四図）尚九州に就て知らんと欲する処は，土偶の有無（出たりといふことを聞くのみ）石棒有無の如何にあり（今後発見せらるゝやも知れず）要するに九州石器時代遺跡は性質は，関東奥羽地方の遺跡と，大体に於て変らぬこと，及び其の石器土器を製造使用したる所の人民は，要するに同一人種に属するものなることを，断言せんと欲するなり。

２　河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ

医学博士　鈴木　文太郎

余は大正六年六月本学文科大学の濱田教授の一行に随ひ，同僚足立博士と倶に，其後鳥居龍藏氏発掘に係る小金井博士調査（人類学雑誌第三十二巻第十二号「河内国道明寺大字国府字乾の石器時代遺跡より発掘せる人骨に就いて」）の人骨を採集せられたると同一地点に於ける発掘に参加し，同じく人骨を採集し，又同年五月熊本県宇土郡轟村貝塚にて同地方庁の特別の厚意と熊本医専の川上，山崎両学士の案内と助力とに由り人骨を採集し，現に両者は京都医科大学解剖学教室に所蔵す，其他に猶ほ京都文科大学に大正四年六月文学士内田寛一氏の備中国浅口郡西大島村津雲貝塚にて発掘せる人骨あり，此人骨の一部は既に松本彦七郎氏が動物学雑誌（第二十八巻）に津雲人種と命名し数次記述せるものと同一所に於て発見せるものなりと云ふ。

余が今爰に以上挙げたる人骨に就て報ぜんとするに際し予め諒知を得んとするは，只其一部の骨骼の概報に止むるにあり，実は此等人骨の全般に渉り記述せんには先づ十分なる比較資料の準備を要するも余の現下の事情は到底夫れのみに没頭を容さゞるが為めなり。

熊本県宇土郡轟村にて獲たる主要なるものは該地貝塚にて余躬ら発掘せるものなり，此人骨は男女の二躯と是より以前に同一地にて川上，山崎両氏の発見せられたる頭骨破片，肢骨其他同地小学校に在りたるもの等若干とあり，内男骨は頭蓋を除けば殆んど全身のもの具足し女骨は頭蓋の一部は復旧するを得たるも，残余は多く破片にして，僅かに肢骨の一部具存するに過ぎず，概して同地採集の人骨は男女倶に造構繊弱なり，男骨に就ては頭骨，手骨及び足骨を除けば，殆んど計測せるも，対比資料を欠くを以て，今は其一部の数を示すに止む。

河内国国府のものは男骨一軀，他に二軀若しくは三軀の混合にして性別，所属など十分判然ならず，頭骨は総べて僅かに破片を残すに過ぎざるも，余は主として肢骨を存す，其構造は概して屈強なり。

備中津雲貝塚のものは頭骨三個の他，軀幹骨，肢骨約一軀分あり，恐らく三個の頭骨中の一個は此の軀幹骨等と同一体のものならんと察す，頭骨は土壌と塊結せるまゝなりしも総て余の手にて復旧せり，而して頭骨中其一は老年者（表中Ｂと記せるもの）のものにして矢状縫合及び三角縫合の一部共に杜塞せるが為め，能く土中にありて破壊することなく，頭蓋の概形を保全せるも，基底部は全く破壊欠損し，其二は壮年者（表中Ａと記せるもの）のものにして上下より痛く圧せられ，顱頂骨は破摧し，頭蓋腔内に陥没し，基底部も亦腔内に没入し，顳顬部は外方に排出し，辛く復旧を行ひたるも，到底信ずるに足るべき計測を施す能はず，其三は猶ほ破摧欠損の度甚しく，只肢骨中少しく完全なるものあり，骨骼の造構は概して強大なり。

以上の諸骨を集め其内より稍々計測に適するものを選び，左記の数表を編成せり，されど頭骨の如き形状不完全にして其僅かに一二過ぎず，又下鰐骨，肢骨等の如き殆んど数片に折損せざるなく，総て人工を加へ接合せるものにして，其計測数の如き必しも正確を期すべからざるや固よりなり，又対比資料としては主として余が京都解剖学教室の標本に就て躬ら計測せるものに拠る，但し頭骨を除く，即ち二十二乃至五十六歳の男，二十乃至五十四歳の女各三十人の平均中数にして，其詳細は余が著人体系統解剖学第一巻を参照せよ，又表の数字中特に本報告を草するが為め，四捨五入の換算をなせるものあれば，一二の変動あるを諒せられたし，又余が所計の標本の原籍地に就ては，余りに信を措くに足らざるも，参考とし記するときは，山城三十五人，大和六人，紀伊近江各三人，余は区々たり，又余の計測中若しくは従来諸氏の報告中，対比を欠くものは，今は補充の遑なく，其不備を告白し，後来の研究に待つの他なし，現代アイノ人に関する数字は，

余は何等の経験なく，全然小金井博士の計測数に拠る。

前期数表に就ては単に計測の実況を示すに止め，比較結果の如何は総て読者の意向に一任せんと欲し，強て結論の如きを試みざるべし，是れ所検人骨数の僅少なると，発見地の区々なるとに由り，反て誤謬に陥るの惧あればなり，従て平均中数を示めさゞるも亦同一理由に基く。表中下肢に於ける一二の数は日本人並びにアイノ人の数とは多少差隔を看るは，或は時代の相違より来りたる現象なりや測り難し，脛骨匾型，後俯及び傾斜角度の大なるが如き必しも石器時代人類の専有なりとせず，現代と雖も未開民族に共通する点より看るも，文化の進歩と是れに伴ふ生活状態の変遷とは，時代と倶に体形上多少の影響なきを保せず，是れ又生物進化の信条よりするも敢て不可能ならざるべし，従て瑣細の差違に就て云々するは大いに学者の慎戒を要すべきものとす。

小金井博士の言明せられたるが如く，国府人骨の現代アイノに一致若しくは近似するは，是れを疑ふにはあらざるも，互に計測手法の差違あるを免れずして，余の計測を通覧するときは国府人骨中，特に大腿骨体中央部の矢状横径率数の多大なるものを除けば，現代日本人の差隔範囲内にありて敢て背馳せざるものあるは，是れ又疑ひなきものとす。

其他国府人骨と倶に発掘せる(一)遺物中石器，土器，祝部等の他に玦様の耳輪などを包有せること（遺物に就ては濱田教授の詳報ある筈なり）(二）人骨姿位の状況等を総合考較するときは，今果してアイノ祖先に類似の事実ありや否やは詳ならざるも，少くとも現代アイノとは関係なきは明白ならんと信ず。

就中人骨姿位の如き，余が轟村貝塚及び河内国府に於て経験せる事実は全く同一軌にして悉く仰臥し，下肢は股関節及び膝関節に於て屈折し，膝を樹て（内には土層の重量の為め崩壊せると察せらるゝものあり），恰も蹲踞の姿勢をなすが如く，上肢は肘関節を屈折し，両手を互に組みて胸上に安置せり，又河内の同一地点に於て大阪の大串博士の発掘に係るもの（同氏の談話に拠る）及び津雲貝塚（内田文学士も亦曽て此姿勢に注目せられ喜田博士など議論ありたりと云ふ，但し考古学教室梅原嘱托の談話に拠る）のものも亦同様なりと云ふ，是れ現代アイノ人の埋葬習慣とは少しく相違あるものゝ如し。

此に由り是れを観るときは，国府の人骨発見地は現代アイノと関係なきは殆んど疑ひを容れず，且つ其夥しく人骨の群在せると遺物の種類，様式等とより推考するときは，恐らく古墳時代若しくは其近き前後に於ける庶民の埋葬地域なりしや疑ひなかるべく，従て其人骨の現代アイノ人に一致若しくは近似すと云ふ小金井博士の所説は，或は所謂似て其非なるものにあらざるなきを保せず。

終りに臨み我石器時代の住民に就て一言愚見を述べんとす，元来此問題に関しては曽て坪井博士はコロポツクル説を唱へ，小金井博士は之れに反しアイノ人説（同氏著「日本石器時代の住民」明治三十七年東京春陽堂発行）を唱へられたり，されど両者の所論を見るに未だ首肯に足るものなきを遺憾とす，就中体形的人類学の方面に於ける小金井博士の当時を看るに，僅かに上膊骨，大腿骨，脛骨の三種の長大なる肢骨に於ける計測に基き，一方諸家の所説を引用し論拠を構築せられ，考古学上アイノ人の石器使用者たるを力説せられたり。

要するに是れ主としてコロホツクル説に抗弁するの為めならんなりと雖も，独りアイノ人の石器使用を是認するのみを以てしては，未だアイノ人先住の立論上毫も効果を認むべからず，必ずや同時に日本人祖先の石器使用の有無を決定するの要なかるべからず，然るに其事なきが如し，今若し現日本人の祖先の石器使用を否定するの立証確固となるに至れば，求めずしてアイノ人先住説の成立を看るべきものとす，然らざれば石器の果して孰れの民種に属するかの判定をして不可能ならしめ，コロホツクル説の架空なると同じく，アイノ説も亦其論拠の極めて浅弱なるを覚ゆる所以なり，況んや解剖学上の事実にして未だ深く傾聴に足るものなく，又本邦の考古学上の知見を拡充するに従ひ，日本人祖先の石器使用は漸く疑ふべからざるに至れる

に於てをや。

由来考古学者流の研究方法を看るに，任意の傾向を示し，多く自家の嗜趣に駆られ，未だ同一遺跡より其遺物の全般を挙げて考較するの方法に出でざりし嫌なき能はず，所謂アイノ式，弥生式等の命名，類別の如き，偶々其弊を露したるものにして，先住民問題上多少の累を及ぼしたるやも測られず。

今若し考古学をして真に組織的学術たらしめんには須らく任意の拾捨を廃し，凡て一処の遺跡より発掘せる遺物は地層を逐ふて類別し，包含物の全部を挙げて採集するの必要を覚らざるべからざると同時に，人類の遺骸にして存するものあらば，細心注意して悉く倶に採集し斯の如くして遺跡の分体，遺物の分類等を考定し，爰に始めて意義ある結果を得るものとす，されど従来の如く濫掘是れ事とし，更に整理を等閑に付するに於ては，単に学術上貴重なる遺跡を荒廃せしめ，遺物を散逸せしむるに過ぎず，到底斯学の進歩は得て望むべからざるなり。

又一方に体形的人類学上に関する現代日本人体の調査に就ては現今の状況猶ほ頗る幼稚にして準拠に足るべき何等正確なる資料ある事なく，斯学上先住民問題の如きを論議せんとするに際し，僅かに断片的資料に拠り是非を決せんとするよりは，先づ十分信拠に足るべき比較資料をして整理充実せしむるを第一要義となさざるべからず，今余の所見を以てせば，少なくとも東北，関東，北陸，近畿，中国及び九州等の地方に於ける現代日本人の骨骼に就て，協定的方法に準拠し，秩序ある計測を施行し，日本人間に於ける異同及び差隔を究明し，次で時代的相違の有無を検し，或は他民族との比較に資すべきものとす，而して今日迄は我学界に於て斯の如き企図ありたるを知らず。

元来人類学と考古学とは恰も，輔車脣歯の関係にして，一民族の研究上，其一を欠きては到底完全なる知識を得べきものにあらず，組織あり秩序ある研究に由り両者互に提携し，以て斯学に貢献するにあらざれば，真理の啓発は得て望むべからず，而して其最も必要なるは各本領に応じ，基本的研究方法を統一協定するにあり，若し同一事項に対し，各自任意の方法に拠り研究調査に従事せんか，其結果頗る紛雑し，相互の考較の便を失ひ，多大の労費も遂に其効を失ふこと尠しとせず，爾来余は学者の協定的事業を促したること一再にして止まらざるも，常に失敗に帰せるは慚愧に勝えず，而して其原因の果して本邦学者の余まりに自家の功名心に執著なるにありや，或は研究の真義を解せざるにありや，或は懶性労を吝しむにありや，三者恐らくは其一にあらん。

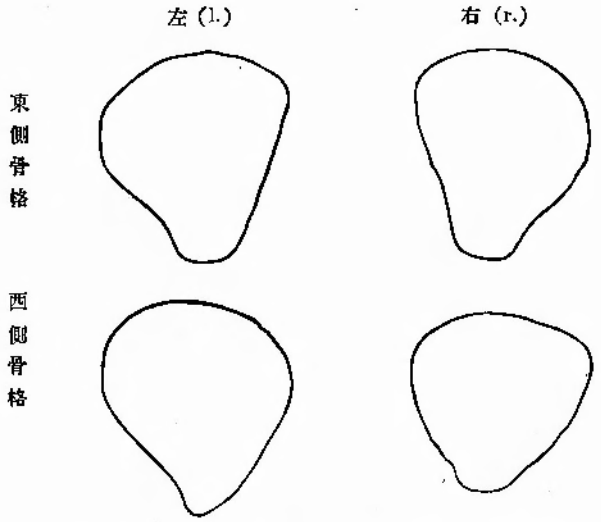
以上縷述するところを以てせば，我学界の現状は未だ先住民の如何を論決するに足るの資料を欠き，従つてアイノ先住説の如き，猶ほ幾多の洗練拡充に待たざるべからず，況んや南洋民族の移来の如きに於てをや。

更に以上に拠り先住民に関する余の臆想を述べんに，余は我邦土に人類創生の当初は暫く論外とし，他に重大なる理由の存せざる限り，我邦石器時代は既に今日日本人と称するものゝ祖先の栖息し，石器，土器等を製し，又は使用し，我史上諸種の部属を示すは畢竟同一民族の各地に割拠せるに他ならずして，遂に今日に伝承せるものと想定するの正当なるを信ぜんとするものなり，而して辺境にありては隣接諸民族と交渉ありて，多少の混淆を見たるは，是れ又疑を容れず，而も人類発達の過程たる石器使用の時代を超化せるが如き，文化程度を有する民族の突如として現出し，我邦土の主権を占めたるにはあらず，是れ遺跡，遺物の漸遷なる事実に徴すべく，古く日本の国土に栖息し，石器を使用せる日本民族の或る部属にして，特に支那朝鮮の如き大陸民族文化に接し，夙に感化発達を遂げたる優秀者の建国統一したるものならんと信ず，但し余の所謂日本民族とは固有日本民族を指すものとす。

而してアイノ人に至りては其俗の大いに北方民族（西比利亜，北欧等を指す）系と共通するの点より推考するときは，北方寒帯地の郷土より南下し来り，遂に日本民族と触接せるものゝ如く，其南下時代も遥かに日本民族の建国に晩るゝものにして，決して温帯地方に発跡し北退せる民族ならざるが如し，又其触接界線は恐らく津軽海峡を上下せるなるべく，是れ寒温両帯なる生物界の分体上，特殊の限界線の同じく津軽海峡

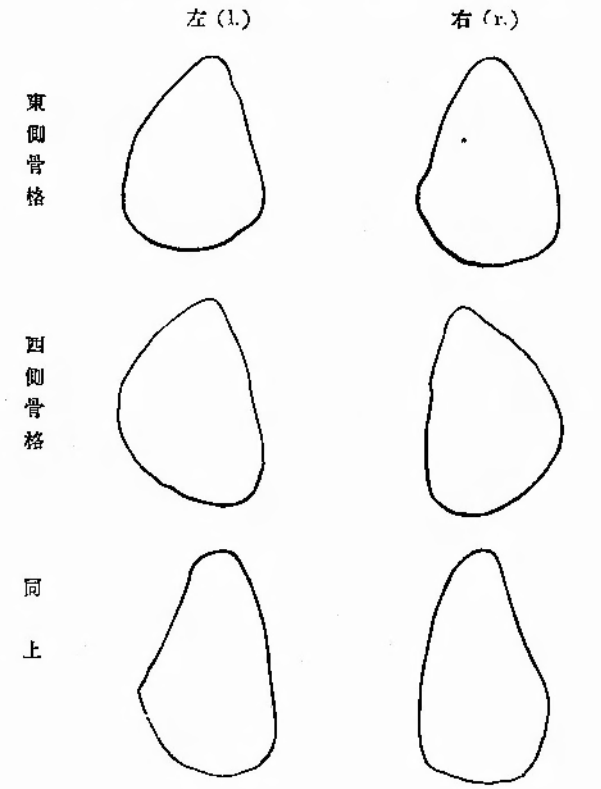
に存するより類推するときは，人類と雖も当さに此の関係なきを保せず。

又我史上に蝦夷と称するものは，恐らく現代アイノと同一視すべきにあらず，或は反て日本民族の一部属にあらざるや，余は此疑義に就ては長谷川博士と感を俱にせんと欲す，又晦昧誇張なる古史浮動なる言語等は一程度迄は無論信重すべきなるも遂に其範囲を超絶する事蹟に就ては，反て揣摩臆測に陥るを以て，博く人類一般の発達経程に準照し，事実に拠り推考判定するは，当さに現代科学的研究の真髄たるべし。



第九圖 國府發見大腿骨體中央斷面圖

Fig. 9. Transverse Sections of Femora, Kō Skeletons.



第十圖 同上脛骨體中央斷面圖

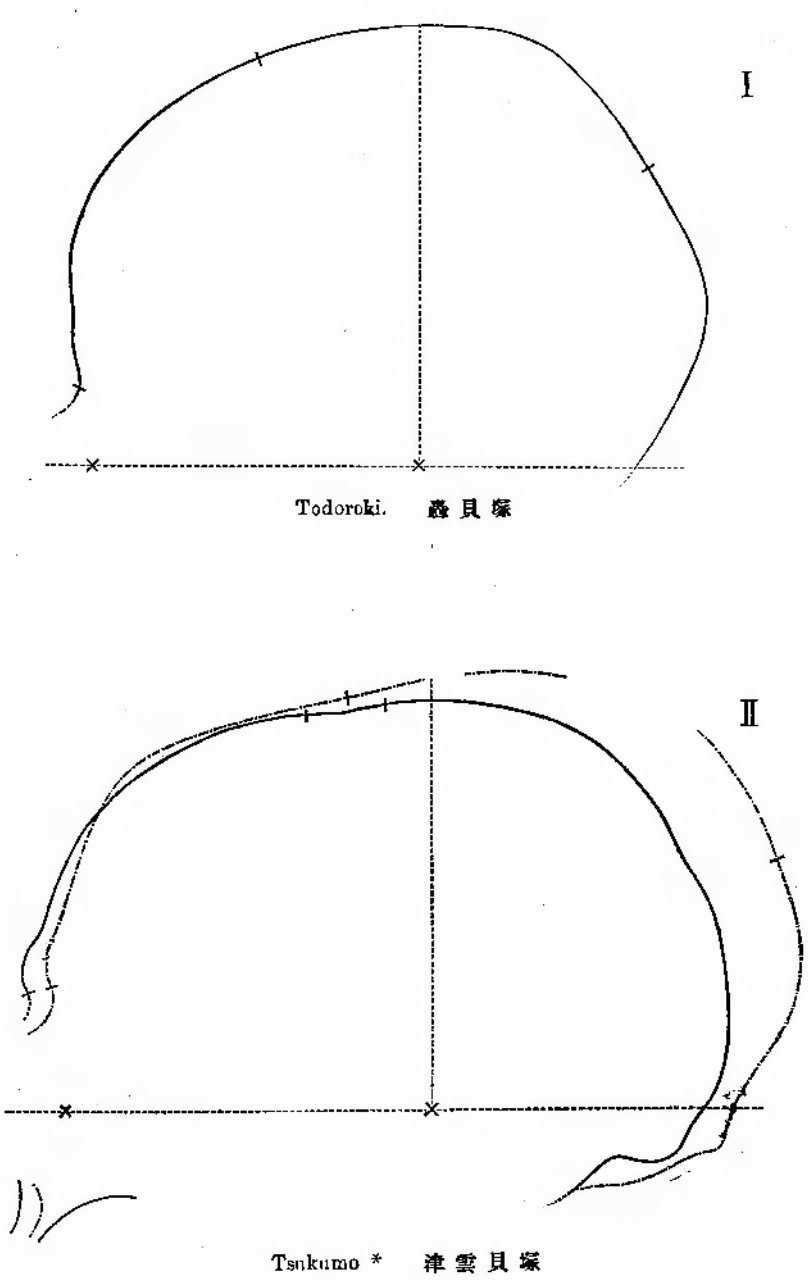
Fig. 10. Transverse Sections of Tibiae, Kō Skeletons.

第十一圖　(1)轟貝塚發見頭骨　(2)(3)津雲貝塚發見頭骨

Fig. 11.—1. Skull found at Todoroki.　2, 3. Skulls found at Tsukumo.

第十二圖　轟及津雲貝塚發見頭骨正中匡線（鈴木博士）

Fig. 12. Outline Tracing of Norma lateralis of the Skulls found in Shell-mounds, at Todoroki & at Tsukumo.



Todoroki.　轟貝塚

Tsukumo *　津雲貝塚

* Dotted line is of A & the other line of B in Table 1.

虚線ハ第一表中A實線ハ同Bニ屬スルモノ

六四

第一表

Table Ⅰ

頭骨	轟	津雲 A	津雲 B	現代日本人		現代アイヌ*		Cranium
	女	男	男	男	女	男	女	
最大長径	168	(198?)	189	178.4	169.5	185.8	177.2	Grösste Hirnschädellänge
最大幅径	133	—	144	141.1	137.6	141.2	136.8	Grösste Hirnschädelbreite
率数	79.2	—	76.2	79.2	81.3	76.5	77.6	Längen breitenindex
耳高	118	(115?)	109	—	—	119.3	115.0	Ohrhöhe
地平周廻	490	—	540	505.8	487.6	522.5	501.7	Horizontalumfang
前頭最小幅	88	100	113	91.8	92.9	93.2	92.4	Kleinste Stirnbreite
上顴幅	—	97	103	98.3	94.6	—	—	Mittelgesichtsbreite
上顔面高	—	66	68	70.3	66.9	69.8	65.5	Obergesichtshöhe
鼻高	—	51	49	51.4	48.2	50.5	47.4	Nasenhöhe
鼻幅	—	25	(39?)	25.3	24.8	25.6	24.7	Nasenbreite
率数	—	49.0	(76.6?)	49.0	51.6	50.7	52.1	Nasalindex
眼窠最大幅	—	40	40	40.1	38.6	40.9	39.8	Grösste Orbitalbreite
同高	—	34	33	34.6	34.5	34.9	33.9	Grösste Orbitalhöhe
率数	—	85.0	82.0	86.5	89.6	85.3	85.2	Orbitalindex
	♀	♂	♂	♂	♀	♂	♀	
	Todo-roki	Tsukumo		Japaner (recent)		Ainu* (recent)		

*小金井氏ニ拠ル

*Nach Koganei

第二表

Table Ⅱ

下顴骨	轟	津雲 (A)	津雲 (B)	国府		現代日本人		現代アイヌ*		Mandibula
	女	男	男	男	女	男	女	男	女	
小頭間距離	—	(122)?	—	—	—	—	—	—	—	Kondylenbreite des Unterkiefers
下顴角間距離	96	—	97	(98)?	—	97.2	92.5	102.0	95.6	Winkelbreite des Unterkiefers
頤高	27	30	22	(27)?	(23)?	—	—	33.8	32.6	Kinnhöhe
枝最小高	48	(r.) 51(右)	(r.) 48(右)	45	48	48.5	42.1	—	—	Kleinste Asthöhe
同最小幅	28	(r.) 35(右)	(r.) 38(右)	30	34	33.4	31.4	—	—	Kleinste Astbreite
率数	58.3	68.6	79.2	66.7	70.8	69.0	70.0	—	—	Index des Unterkieferastes
下縁厚	9	13	9	8	11	—	—	—	—	Dicke des corpus manbidulae
下顴角度	128°	(r.) 127°(右)	(r.) 120°(右)	125°	128°	123° †		125°	123°	Winkel des Unterkiefers
	♀	♂	♂	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
	Todoroki	Tsukumo		Kō		Japaner (recent)		Ainu* (recent)		

*小金井氏ニ拠ル †ベルツ氏ニ拠ル

*Nach Koganei †Nach Bältz

第三表　　Table Ⅲ

上膊骨	轟							津雲		国府			現代日本人		現代アイノ人*		Humerus
	男		女		1.	2.	3.	男		男		1.	男	女	男	女	
	右	左	右	左	右	左	左	右	左	右	左	右	右	右	右	右	
最大長	266	(260?)	—	260	—	—	—	294	292？	—	—	—	294.3	273.2	295.0	273.9	Grösste Länge
生理的長	262	—	—	—	—	261	—	291	—	—	—	—	289.7	269.3	—	—	Ganze Länge
上幅	40	—	—	—	—	41	—	47	46	—	—	—	45.3	41.9	47.6	43.2	Obere Epiphysenbreite
下幅	48	49	50	—	—	—	—	58	—	—	—	—	58.4	50.6	59.5	54.6	Untere Epiphysenbreite
体最大径	18	17	18	18	17	21	18	23	23	20	20	18	21.2	17.2	22.6	21.0	Grösster Durchmesser der Mitte
同最小径	14	14	14	14	16	15	15	17	18	13	13	15	17.6	15.2	17.3	15.7	Kleinster Durchmesser der Mitte
率数	77.8	82.4	77.8	77.8	94.1	71.4	83.3	73.9	78.3	65.0	65.0	83.1	83.0	82.7	76.5	74.8	Diaphysenindex
最小周廻	54	58	52	52	—	60	54	65	67	56	56	54	62.3	52.9	63.2	56.1	Kleinste Umfang
捻転角度	157°	—	—	—	—	168°	—	149°	—	—	—	—	153.7°	168.4°	—	—	Torsionswinkel
	r.	l.	r.	l.	r.	l.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	r.	r.	r.	r.	
	♂		♀					♂		♂		l.	♂	♀	♂	♀	
	Todoroki							Tsukumo		Kō			Japaner (recent)		Ainu* (recent)		

*小金井氏ニ拠ル

*Nach Koganei

第四表

Table IV

大腿骨	轟 男 右	轟 男 左	轟 女 右	轟 1. 右	轟 2. 右	轟 3. 左	轟 4. 左	轟 5. 左	津雲 男 右	津雲 男 左	国府 男 右	国府 男 左	国府 1. 右	国府 2. 左	国府 3. 右	国府 4. 左	現代日本人 男 右	現代日本人 女 右	現代アイノ人* 男 右	現代アイノ人* 女 右	Femur
最大長	383	—	—	—	—	—	—	—	—	422	—	—	—	—	380	—	409.2	382.8	407.7	382.2	Grösste Länge
生理的長	377	377	—	—	—	—	—	—	—	418	—	—	—	—	376	—	405.4	378.2	—	—	Ganze Länge in der natürlich Stellung
転子最大長	371	369	—	—	—	—	—	—	—	406	—	—	—	—	373	—	394.9	367.6	390.4	365.4	Grösste Trochanterlänge
同生理的長	358	358	—	—	—	—	—	—	—	397	—	—	—	—	363	—	384.1	357.6	—	—	Trochanterlänge in der natürlich Stellung
大腿骨体 中部矢状径	24	23	22	23	28	29	24	25	27	28	28	28	28	28	—	24	26.6	23.5	27.8	24.7	Sagittaler Durchmesser der Mitte
同横径	22	23	30	25	26	26	26	27	25	25	24	25	25	25	—	23	25.5	23.2	26.6	24.4	Transversaler Durchmesser
率数	109.1	100.0	110.0	92.0	107.7	111.5	92.3	92.6	108.0	112.0	116.7	112.0	112.0	112.0	—	104.0	104.0	102.1	104.5	101.2	Index des Diaphysen-querschnittes
同周廻	72	72	68	75	82	85	76	80	80	83	80	80	83	85	—	75	81.8	72.3	88	80.1	Umfang
上部矢状径	20	20	—	—	23	—	—	—	24	25	22	23	—	24	23	—	24.5	22.3	23.8	21.3	Oberer sagittaler Durchmesser
同横径	27	27	—	—	28	—	—	—	30	30	28	28	—	31	28	—	29.9	27.2	32.3	30.8	Oberer transversaler Durchmesser
率数	74.1	74.1	—	—	82.1	—	—	—	80.0	83.3	78.1	82.1	—	77.4	82.1	—	81.7	77.6	73.7	69.2	Obere Index
頸垂直径	28	26	—	—	—	—	—	—	33	32	—	—	—	—	—	—	32.7	28.3	—	—	Vertikaler Durchmesser des Collum
同矢状径	21	21	—	—	—	—	—	—	27	28	—	—	—	—	—	—	23.1	21.4	—	—	Sagittaler Durchmesser des Collum
大腿骨上幅	72	72	—	—	—	—	—	—	82	84	—	—	—	—	—	—	80.9	73.6	89.0	80.0	Obere Breite
同髁幅	67	66	—	—	—	—	—	—	—	77	—	—	—	—	—	—	78.6	69.7	78.6	71.5	Epikondylenbreite
外髁最大矢状径	54	53	—	—	—	—	—	—	—	59	—	—	—	—	—	—	59.6	54.3	—	—	Grösste sagittaler Länge des condylus lateralis
捻転角度	25°	22°	—	—	—	—	—	—	—	18°	—	—	—	—	—	—	11.5°	22.3°	—	—	Torsionswinkel
頸体角度	138°	137°	—	—	—	—	—	—	—	130°	—	—	—	—	125°	—	136.5°	135.3°	—	—	Rotationswinkel des Collum
髁体角度	80°	80°	—	—	—	—	—	—	—	80°	—	—	—	—	77°	—	79.7°	71.2°	—	—	Condyo-Diaphysenwinkel
	r. ♂	l. ♂	r. ♀	r. 1	r. 2	l. 3	l. 4	l. 5	r. ♂	l. ♂	r. ♂	l. ♂	r. 1	l. 2	r. 3	l. 4	r. ♂	r. ♀	r. ♂	r. ♀	
	Todoroki								Tsukumo		Kō Dōmyoji						Japaner (recent)		Ainu* (recent)		

Femurdiaphysen

*小金井氏ニ拠ル

*Nach Koganei

第五表　　Table V

脛骨		轟						津雲		国府						現代日本人		現代アイヌ人*		Tibia
		男		1.	2.	3.	4.	男		男		1.	2.	3.	4.	男	女	男	女	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	左	右	左	右	右	右	右	右	
最大長		321	—	—	—	332	—	—	—	—	—	—	—	—	—	331.9	307.1	—	—	Grösste Länge
生理的長		304	305	—	—	316	—	—	332	—	—	—	—	—	—	311.5	389.5	—	—	Ganze Länge
体矢状径		26	26	27	28	27	26	32	32	27	26	30	30	27	27	28.2	23.2	30.9	27.5	Sagittaler Durchmesser der Mitte
同横径		20	18	20	21	18	19	19	20	20	20	20	20	20	20	21.0	18.6	19.4	17.8	Transversaler Durchmesser der Mitte
率数		76.9	69.2	74.1	75.0	66.7	73.1	59.4	62.5	74.1	77.0	66.7	66.7	74.1	74.1	74.8	80.0	62.8	64.7	Index cuemicus
同周廻		70	69	76	80	73	75	84	85	72	70	80	80	73	73	78.2	66.1	81.6	73.4	Umfang der Diaphyse
捻転角度		13°	14°	—	—	7°	—	—	22°	—	—	—	—	—	—	14.1°	9.2°	—	—	Torsionswinkel
内髁	後俯角度	14°	17°	—	—	17°	—	—	7°	—	—	—	—	—	—	12.3°	14.4°	—	—	Retroversionswinkel
	傾斜角度	10°	13°	—	—	13°	—	—	12°	—	—	—	—	—	—	9.1°	10.7°	—	—	Inklinationswinkel
		r.	l.	r.	l.	l.	l.	r.	l.	r.	l.	l.	r.	l.	r.	r.	r.	r.	r.	
		♂		1	2	3	4	♂		♂		1	2	3	4	♂	♀	♂	♀	
		Todoroki						Tsukumo		Kō (Dōmyoji)						Japaner (recent)		Ainu* (recent)		

*Nach Koganei

＊小金井氏ニ拠ル

3　肥後轟貝塚発掘報告

（1）肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告

文学博士　濱田　耕作
榊原　政職

第一章　発　　掘

第一節　貝塚の状態〔図版第三四―第三六〕

肥後国宇土郡轟村貝塚は轟清泉の所在地なる大字宮ノ荘村落の東南に在り。西方丘陵の麓狭少なる洪積層台地の東南に延びて，冲積層平地に接する隅角は，即ち吾人の発掘を試みたる地点なりとす。小字を洲崎と名く。

此の洪積台地は冲積層の平野より高きこと僅に六七尺のみ。今ま台地の端をなせる処は，稍断崖状を呈するものありと雖も，是れ漸次陵夷開懇せるによるものにして，往古は緩傾斜を以て之に接続せるものなること想像に難からず。此の断層面に於いて貝殻層は地表下約五寸を以て始まり，厚さ概ね二尺に達せり。貝塚の広袤は之を明にすること容易ならざるも，北は桑畑を越えて宇土町に至る道路に至るまで貝殻の散布するあり。其の道路の台地を降る地点に接して存在せる穿井を窺ふに，なほ貝層の前記断崖に於けると略ぼ同様の状態に存するを知れり。又た西方は一民家の屋後に貝層の露出するものあり。此等の事実によりて考ふるに少くとも本貝塚は約一町平方に近く拡がれるものなることを想像せしむ。

本貝塚の東方冲積層の帯地を越えて，古への城山の丘陵の聳ゆるものあり。其の西麓冲積平地より高さ約十数尺の地点に於いて断崖状を呈せる一線あり。此の地点に貝殻層の露出して，其の厚十尺に及ぶものあるを見る。これ亦た貝塚なることは土器破片の伴出するを以て疑ふ可からず。然れども此の地点と前述の宮ノ荘貝塚とは，元と接続せる一貝塚なりしや否や。吾人は其の地形と冲積帯地の上に貝殻の存在せざる事実よりして，元来互に独立せる接近貝塚たりしことを信ぜんと欲す。

本貝塚の学界に現れしは何時に始まれるか。或は言ふ，明治十四年の頃モールス博士の踏査を経たりと。未だ其の確たるを知らざるも，早くより地方人士間に石器の散布地として知られたりしが，大正六年五月京都帝国大学教授医学博士鈴木文太郎氏は熊本県属矢野寛氏の東道によりて本貝塚を調査し，其の一部を試掘して人骨三体を得られたるは，実に轟貝塚の人骨を包蔵するを明にせられたる嚆矢なりとす。京都帝国大学助教授医学博士清野謙次氏は乃ち余に謀るに本貝塚の発掘を再びし，鈴木博士の企図を継承せんことを以てせられたるを以て，更に余等は熊本県属史蹟調査会と提携して遂に大正八年十二月発掘を遂行するに至れり。（濱田）

【注】

（1）明治十四年頃モールスの此の貝塚を訪問せしこと，角田政治君「熊本縣誌」（大正六年）第二七三頁に見ゆるのみ。

（2）本報告書第二冊鈴木博士「河内国府及肥後轟に於ける人骨の発見を報し，及び日本石器時代住民に及ぶ」及び人類学雑誌第三十三巻第三号「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就て」参照。

第二節　発掘の経過〔図版第三六―第三九〕

十二月十六日余等の轟村宮ノ荘に到着するや，金田岩太氏の好意により，其の邸宅に滞在するの便宜を得，先づ貝塚の地形を踏査し，曽て鈴木博士の発掘を試みられたる東南隅に接近せるⅠⅢ，及びⅡ区を発掘するの有望なるを認め，十七日より発掘に着手せり。人夫は平均五人を使役し，一区域の発掘進行して，貝層に

達し，人骨に遭遇するや，主として清野博士等の手によりて精査し，人夫をして隣接区域を発掘し，其の泥土は努めて既調査の窪処を埋没するの用に供せしめたり。即ちペトリー教授の所謂「順掘り」式方法を可成的に応用せるものなり。

貝塚の表面は地表下約七寸は耕作土にして，少許の貝殻を交へたるが，以下二尺余は密実なる貝殻の層をなし，其以下は黒土層にして何等遺物を交へず。されば発掘比較的困難ならず。先づⅠ区に於いて散乱せる第一号人骨及び第二号乳児の人骨を発見し，Ⅲ区の隅角に於いて貝輪を上膊に篏装せる人骨を発見せり。こは頭蓋を欠損せるも，他の諸部は比較的良好に残存せり。Ⅱ区に於いては何等得る所なかりき。第Ⅳ区に於いては第四号以下第七号の四箇体を発見せるが，就中第六号は第五号の下層に存在せるは異例なりとす。第Ⅵ区は第Ⅳ区よりも更に密集せる第九号以下第十六号に至る八箇体の人骨あり。就中第十号第十六号等を以て最も完好とす可きも，他は多く不完全なるものに過ぎず。Ⅴ区に於いては僅に乳児の遺骨を発見せるのみにて，第Ⅶ区に於いては何等得る所なかりき。

吾人はⅣⅥ両区に於ける人骨の豊富なるを認め，此の地区に接近して，直角に西北に延長せるⅧⅨ両区の発掘を試みしが，前者には第十七号，後者には第十八号の各一箇体を発見したるのみにして，更にⅩ区に於いては全く何等の遺物を発見せざりき。茲に於いて方向を転じⅪ区の発掘を試みしが，此の方面に於いても遂に得る処無く，一先づ這回の発掘を終了せるは十二月二十三日なりき。

石器及土器の破片等は貝層及び表土中に混在し，敢て特殊の存在状態の記す可きもの無く，人骨は屈葬なるも，其の方向は一定せるものあるを見ず。石器土器等に関しては後節之を記す所あり，人骨に関する記述と考察は之を清野博士の記載に譲りて省略す。（濱田）

第二章　発掘の遺物

第一節　石器〔図版第四〇―第四二〕

今回発掘せる石器類は其の数量に於て必ずしも多しと言ふを得ず。其の種類は石鏃,石匙,磨製及打製石斧,砥石其の他不明の三角形石器等なりとす。此等石器の石質に関しては，之を本学教授理学博士比企忠氏の鑑定を請ひ，その示教を忝ふせり。

（イ）石鏃　石器中最も多数にして吾人の嘱目採集せるもの十五個あり。更に精細に砂土を検索すれば尚ほ多くの数を得べかりしならむ。其形式は悉く無柄にして有柄のものを得ず。而かも其の形式三角形にして其凹底は両脚状をなすもの最も多く，其の中唯だ二個は形長くして，二は両脚部左右に提出し，一は較々内方に彎曲し，製作亦た精巧なるを見る。石質は砂岩（sand-stone）六個，他は黒曜石（obsidian）なり。黒曜石中色淡くして一見燧石に似たるものあれど，比企博士の言に従へば，肥前地方には斯の如き黒曜石を産する処ありと云ふ。此等石鏃を本邦他地方のそれと比較するに，其の大さ普通にして，製作亦た前期二例を除き必ずしも精巧なりと云ふを得ざる如し。

（ロ）石匙　大小五箇を数ふ。形式は之を堅形及び横形の二に別つ可く，前者（図版第四二5及6）は大形にして硬質砂岩の薄き自然の破片,若しくは打裂片の両面に加工し刃及把手は比較的厚く,他の部分は薄きを見る。後者（図版第四二7及8）は前者に比して，其の製作精巧にして稍々厚く，且つ小形なるを注意す可く，就中最小なるは幅九分五厘にして，這種例品中寧ろ珍とす可し。（図版第四二7）石質は内二個は硬質砂岩，一箇は黒曜石なり。（図版第四二8）此等両形式の石匙は其形状及び製作に於いて多少の差異あるのみならず，其の用途に於いても亦た多少の区別ありしものに非ざるか。

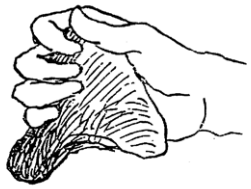
（ハ）打製石斧　三個あり。石質に依り区別すれば，蛇紋岩（serpentine）一箇。（図版第四―5）砂岩二箇（同上2・10）にして何れも中形の粗製品に属し，笏形を帯び，両面より打裂を加へたるものなり。中一個は扁平楕円形なる河原石を取り来りて，刃の部分のみ其の一方の両面を打ち欠きたるは，頗る簡単なる製法を示して面

白し。(同上2)

(ニ) 磨製石斧　六箇中之を形式に従つて分類すれば，略ぼ四となすを得べし。第一者は蛇紋岩を以てし，狭長なる鑿形に近き形式を有するものにして，蛤刃を呈し両面より磨研したり。(図版第四―7) 第二者は二個あり。其の一は粘板質砂岩 (clay　sandstone) を以て作れる，頗る大形のものにして長さ五寸九分，幅二寸六分，厚九分あり。笏形に近きものにして，一面は石片の自然面を僅かに磨研し，他面はなほ打裂面を残存す。唯刃部は精巧に磨研し，稍々薄き蛤刃を呈す。(図版第四―1) 其の二は硬き砂岩を以て製し，型式前者と相類し，形状の小なるのみ。(同上4) 第三者は幅広くして短く，稍々鋤形を呈するものにして，板状にへげたる自然面を利用し，刃部のみを両面より磨研し蛤刃をなす。(同上89) 其の石質は二例共に砂岩なり。第四者は第一第二の両形式の中間に位するものにして一例を有す。(同上3)

(ホ)錘石及円石　錘形は三箇を得たり。何れも大形にして粗製不整形のものに属す。石質は二箇輝石安山岩(図版第四二34) 一箇は著しく風化せる砂岩なり。以上の外関東地方の貝塚よりも多く発見せらるゝ円き河原石の両面を磨り減らしたるもの数箇を発見せり。(同上11・12)

(ヘ) 手持ち砥石（？）　と思はるゝもの三箇あり。(図版第四二13及14) 何れも砂岩より成り，略ぼ四角柱若しくは三角柱を呈し，長さ約五寸あり。其の各面に磨研せられたる痕跡あるを見る。従来古墳より出土せるものに之に類似のもの少なからず。たゞ石器時代の砥石と称せらるゝものは多くは皿形の平石上に磨研の痕あるものを称すれども，斯の如き不動的砥石の外に磨製石器の製作に動的の手持ち砥石を使用せられしは，最も可能のことなりとす。欧洲新石器時代に於いて這般の砥石あることは，学者の夙に知る所[1]なり。



(ト) 三角形石器　是は三箇を採集せり。(図版第四二1及2) 長さ五寸に近く，粗なる打裂を加へて，或は双脚を呈するもの，或は三脚を示すものあり。輝石安山岩及び砂岩を以て製せらる。此の者の用途に至りては詳ならざるも其の凹底部は石塊石片を敲きたる痕あり。試に其の頂端を握れば把握に都合好き形を成せり。或は斯の如くにして一種の敲き石として使用せしものに非ざるか。(上図)

要之，轟貝塚に於いては這回の発掘に際して，発見せる石器は其の数多からざるのみならず，磨製石庖丁無く，磨製石斧の如きも完好なる精品を見ず。製作亦た概して粗造なりと言ふ可し。角田政治君の所蔵に本貝塚より獲たりと称する横溝ある鑿形大石斧あるも遂に斯る石斧は之を得ること能はざりき[2]。(榊原)

【注】

(1) 欧洲新石器時代に於ける手持砥石は瑞典，丁抹，英吉利等より出でたり。Evans, Ancient Stone I mplements of GreatBritain. (London,1897) p.264-265. Stone Age Guide in the Britich Museum.(London,1911) p.127. Mortillet,Musée prehistorique.(Paris,1903)Pl.L.542.S.Müller,Nordische Altertumskunde Strass-burg,1897)vol. Ⅰ.pp.132,193. 等を見よ。又た大正六年五月本教室の河内国府第一回発掘の際，地表に於いて六角形持砥石の破片を発見せり。当時之を石器時代のものに非ざるを思ひ報告書中之に言及せざりしも,或は同じく石器時代のものならむか。

(2) 本報告書第二冊第五三頁参照。

第二節　装飾品〔巻首図版及第四〇〕

装飾品は二箇を獲たり。共に牙製の「提げもの」に属す。一は野猪の牙の根に近く，一箇の孔を其の両面よりて穿るものにして，長さ二寸三分あり。其の貫孔の状態石器を使用せるものなることを明示せり。斯の如き牙製の装飾品は欧洲に在りては，旧石器時代より既に存せること，仏国マデレーヌに於いて発見せられたるによりても知る可く，新石器時代に入りても其の例鮮か[1]らず。本邦諸地方の石器時代遺跡に於いても亦た其の遺品あること人の知る処なり。故坪井正五郎博士が曲玉の起原を以て斯の如き牙製品に発せりと

論せられしは，学界の悉く之を許容する所なること言ふを須いず[2]。

他の一は野猪の牙の琺瑯質の部分を磨研し，其の中央部に二箇の孔を穿てるも，一箇の孔より其の端を欠損す。全長二寸三分。其の折口新しからざるを以て，或は此の一孔を穿つの際に破残せるに非ざるかを想像せしむ。又た裏面に少しく窪める処あり。是れ亦た孔を穿たんとして中止せしものなる可し。此の遺品の如何に使用せられしか明かならずと雖も，恐らくは紐を通じて胸部等に懸垂せしものならむ[3]。

貝輪は第三号及第五号人骨の腕部に篏装せられたるものあり，凡て五箇を数ふ。之に関しては清野君の論文に記されたるを以て茲に贅せず。(榊原)

【注】

（1）欧洲旧石器時代の牙製装飾に就きては，マデレーヌ発見品はLartet&Christy, Reliquae, Aquitanae, (London, 1895.)Pl. Ｂ．Ｖ．p.228　其 他　Ｄ échelette, Manuel d'archeologie,　Ｉ．　ｐ．207 －；Mortillet, Musée prehistorique. Pl.ＬＸＩＸ等参照。同新石器時代のものに関しては，同じくMortilletのPl. ＬＸⅧ，ＬＸＩＸ等を見よ米国発見品に就きてはMoorehead,Stone Age in North America,vol. Ⅱ.pp.149- 参照。

（2）曲玉の起原に関する故坪井正五郎博士の所説は博士の各種の研究に見ゆ。其の「パリー通信」（東京人類学会雑誌第四十四号）に於いて「メキシコに曲玉有り」の項の如き，また「曲玉に関する羽柴三宅二氏の説を読み再び思ふ所を述ぶ」の如き其の一二なり。なほ本邦発見の牙製装飾品に就いてはMunro, Prehistoric Japan.(Yokohama,1911) Figs.160,161. 参照。

（3）本冊巻末附記参照。

第三節　貝類及獣骨

轟貝塚発掘中採集せる貝類に関して，前平瀬介館主任黒田徳米君を煩はして，其の種名を明にせるもの左の十一種あり。なほ吾人の採集に洩れたるもの亦た尠からざる可し。

一，　Rapana thomasiana Crosse　あかにし
二，　Hemifusus ternatanus Gmelin　てんぐにし
三，　Polinices(Neverita)didyma Botten　つめたがひ
四，　Latrunculus japonicus Sowerby　ばい
五，　Cyclophorus herklosti Ｍartens　やまにし（淡水産）
六，　Arca (Anadara)granosa Lischke　はいがい
七，　Arca (Scapharca)subcrenata Lischke　さるぼう
八，　Dosinia(Dosinisca)japonica Reeve　がゞみがひ
九，　Meretrix meretrix Linne　はまぐり
十，　Ostrea denselamellosa Lischke　いたばがき
十一，　Ostrea(Lopha)gigas Thumberg　かき（ながゝき，えぞがき）

就中蛤，牡蠣の類最も多きを占め，且つ此等は頗る大形にして，現時殆ど之を此の地方に於いて認むる能はざるものなり。

次に獣骨は猪鹿最も多きを占め，其他稍々大形動物の肢骨あり。此等の詳細なる研究は，未だ完成すること能はざるを以て，之を他日に譲ることゝせり。(榊原)

第四節　土器〔図版第四三－五一〕

発見遺物中最も多量なりしは土器片にして無慮数百に上る。其の内僅に一二片の祝部土器に類するもの及び近代の磁器片を貝層上部，後世の攪乱を予想す可き処より発見せる外は全部所謂貝塚式土器とも称す可き

新石器時代の遺物にして，津雲，国府其他の如く弥生式土器を発見すること無かりき。又た貝塚式土器は貝層を主として其の上なる黒土層中にも散在するも，後者は後世耕作の為め上置きせる土壌なるのみならず，厚さ二三尺の貝層も其の間何等の層位的差異を認めず。土器破片は各地区全く散乱の状態にありて比較的完形のものさへ発見する能はざりき。されば以下一括して其の形質紋様に就きて叙述せんと欲す。

（一）土器の質性　　轟貝塚の土器は厚手のもの少く，同時に甚だ薄手のものをも見ず。大体に於いて貝塚式土器として中等位より少しく薄手の傾向ありと謂ふ可し。されど厚手のもの（厚約五分）は日向柏田貝塚の土器に類し，其の紋様に於いても相似たるを見る。其の色沢は黝黒色を帯ぶるもの大多数にして，時に暗褐色を有するもの，又た随処に薄牡丹色を発せるものあり。されど茶褐色性のものは殆ど稀にして，黒色性を有するを其大体の特質とす。硬度は寧ろ硬くして，従つて吸湿性少なし。而して河内国府に於ける縄紋式土器に其の色沢硬度及び紋様を類似せるものゝ存在せるは特に注意す可し（1）。（図版第四三上段）此等土器が粘土中少からざる砂を混じたるは，他の貝塚土器と同一にして，たゞ一二破片中多量の雲母を混じたるものは頗る異例に属す。（同上5）

（二）土器の形式　　破片は大なるもの稀なるを以て，全形式を復原するに足るもの無し。されど深き鉢形のもの及び，口長く且つ闊き薄鉢類多きを占むるが如し。底部及び口縁部等より推測するに，最大なるは口径五寸最小なるは三寸内外なるが如し。底部の残片約二十箇あり。其形式種々あるも大別すれば，第十図に示すが如く底面より直に腹縁に開けるもの，底面より腹縁に至る際一旦縮約せるものゝ二とす可し。又た底面其者は水平なるものと，中凹なるものとの二種あり。後者には後世の糸底を想起せしむるものさへあり。底部の遺品中特に注意す可きは席紋の明に附着せられたるもの（図版第五一）及び底縁に簡単なる装飾を加へたるもの（同上）なりとす。口縁部の形式は第十図に示せるが如く種々あるも，後述隆起細帯紋を施せるものは，長頸の薄鉢の器多き等を注意す可し。又た口縁部の突隆せるもの往々にして其れあるも，其の甚しきものは之を見ず。

捉手は之を発見せざりしが，阿高式紋様の一破片に約二寸を距てゝ二箇の「撮み」を附せるものあり。（図版第五〇）装飾的のものに過ぎざるが如きも，亦た実用にも好適するを見る。

（三）土器の紋様　　は従来諸遺跡発見のものに比して，頗る特徴あり。而かも其の或者は質性に於けると同じく，肥後阿高貝塚，日向柏田貝塚及び河内国府のそれと相類するものあるを注意す可し。今ま其の主なる紋様を分類すれば，（イ）隆起細帯紋，（ロ）変様縄席紋，（ハ）爪形及変様爪形紋，（ニ）波線直線紋，（ホ）各種直線紋，（ヘ）刷毛及篦目紋（ト）太形凹紋等となす可し。

（イ）隆起細帯紋は其の数多く轟土器の一特徴をなせり。而かも此の種紋様を附したる土器は表面粗糙にして稍々黒色を帯び，比較的薄手なるを常とす。此の紋様は器の表面に後より粘土帯を附著し，指頭を以て之を伸ばしたるものなるを以て，不整形のもの多く，一見「ミヽズ膨れ」に似たる観を呈す。此の紋は或は直線的なるあり，或は曲線的にして，中には渦線をなすものあり。其の上に刻目を施し縄の如き意義を有せしむる亦た少なからず。（図版第四八等）

（ロ）変様縄席紋　は多く前者と共に応用せられ，其の間地を充填せり。竹木等の尖端を以て刺入し，縄席或は籠目模様に類するものを現はせり。而かも本遺跡に於いて純正縄席紋あるもの絶えて見当らざるは寧ろ意外と言ふ可きなり。（図版第四八上段等）

（ハ）爪形及変様爪形紋　　是は爪形若しくは其の変様たる弧形，或は直線に近きものを並列し或は直線に或は波状をなすものなり。恐くは竹管等を半截して之を附せるものなる可く，其の意義は土器を絡縛せる紐縄を示すに起原せるは言ふを俟たず。厚手のものにも存すれど，堅緻なる薄手のものに施されたるもの多し，其の紋様と質性とに於いて，著しく河内国府遺跡の石器時代土器に相似たるを見る。（図版第四三等）

（ニ）波線直線紋　　は並行直線の下に，若干の距離を有し並行波線を作るものにして多く其の地紋として

篦目羽毛目を附したり。是は主として器腹に施され，褐色の厚手土器に限らるゝが如く，或点に於いて貝塚式土器よりは寧ろ弥生式土器に近似せるを覚ゆ。(図版第四五下段等)

（ホ）各種直線紋　　之に整形及不整形のものあり。前者には竪縞或は横縞に類する並行線紋あり。山形鋸歯形等あり。不整形のものは殆ど篦目刷毛目の地紋に近きものを見る。此の類は厚手にして日向柏田貝塚発見の土器に酷似[2]せり。(図版第四九)

第十圖　轟發見土器形式圖

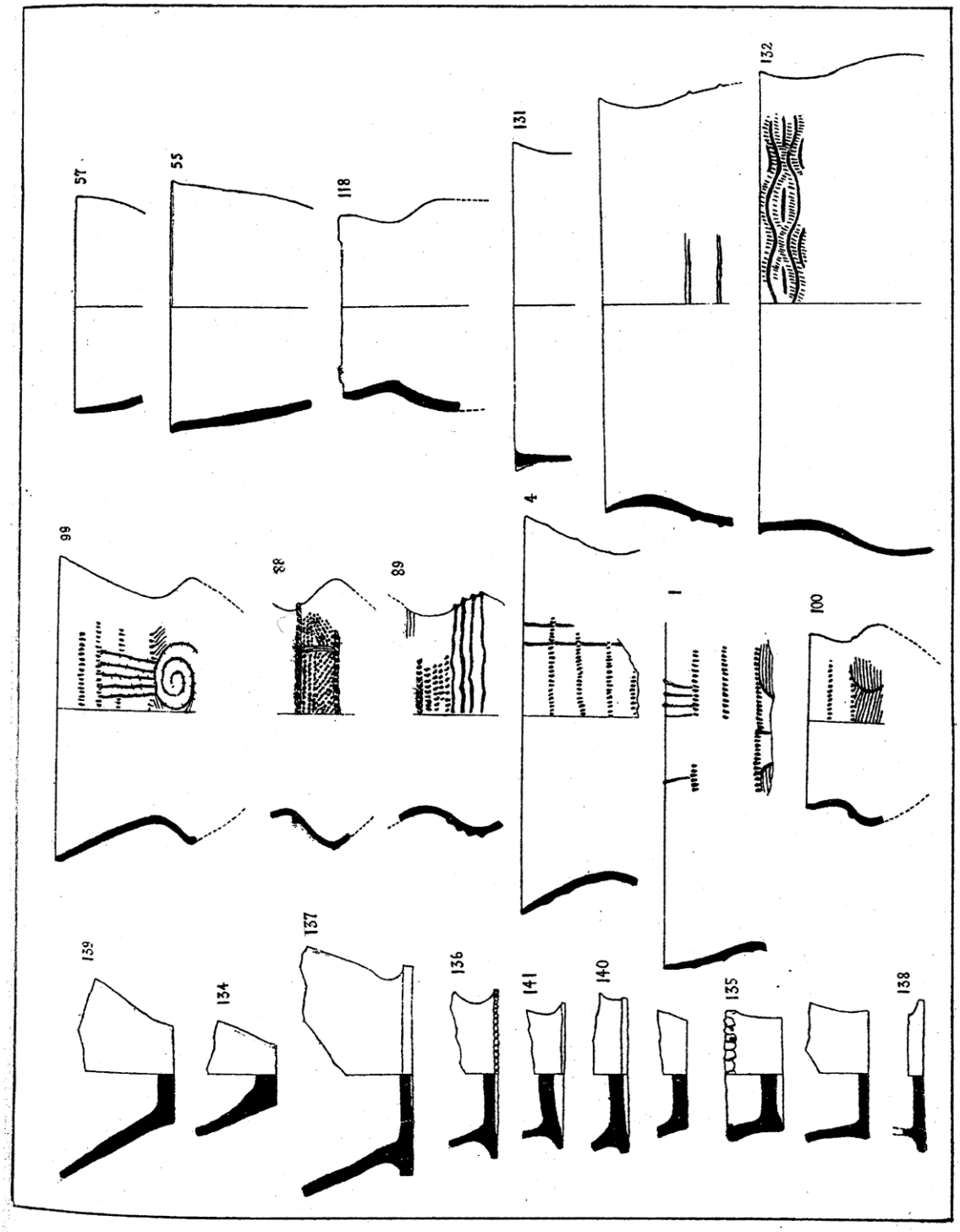


Fig. 10. Forms of the pottery found at Todoroki. (Umehara)

（ヘ）刷毛及篦目紋　　亦た比較的整形なるものと，不整形にして或は分明を欠き素紋とす可きものあり。而して竪に篦目紋を施し，其の上に横に並行直線紋を描き，一見格子紋の観を呈するもの少なからず。（図版第四七等）

（ト）太形凹紋　　は轟貝塚の東方約二里なる阿高貝塚の土器と酷似するものなるを以て，阿高式紋様とも称す可[3]し。其の特徴は指頭或は其他を以て太き凹線を描き，直線曲線の各種紋様を作る。其の紋様は関東式貝塚のものと類するを見る。其の土器は堅くして厚く褐色を帯ぶるを常とす。（図版第五〇）

以上は土器紋様中主要なるものを分類記述せるものなれど，此の以外に特殊のもの無きに非ず，それ等は図版中に之を示したれば，今ま一々之を記さず。別に前記諸土器の存在分量等を便宜表に示せり。

模様は器の表面に附せらるゝも，口開の大なる器等に於いては，口縁の内部にも簡単なる模様を施すこと貝塚式土器に屢々見る所にして，本遺跡の土器にも往々之を認む可く，其の紋様の種類は並行直線紋，連点紋の類なり。（図版第四七下段）又た器縁の上端にも模様を刻するものあり。是は縁辺を堅固にするの実際的必要をも加はれるものと見る可きか。櫛形，連点等多く，稀には厚き口縁に鋸歯紋の如きを施せり。（図版第四四下段）

要之，轟貝塚の土器は隆起細帯紋，爪形及変様爪形紋等を存するものに於いて最も古拙なる性質を発揮し，直線波線紋を有するものに於いて聊か新しき性質を示し，寧ろ弥生式土器に近きものあるを見る。而かも此の両者に於いて何等出土の層位的区別あるを見ず。又た全体として之を見るに，其の製作紋様の古拙原始的なるもの被ふ可からず。或は之を以て他の諸遺跡の石器時代の土器に比して時代の新古を考へず，単に地方的文化の劣等なるの故に帰せしむ可きか。将た又た時代の新古を以て之を律し，稍々古代のものと見做す可きか。是れ自から議論の岐るゝ所なる可し。然れども一方に於いて本遺跡に就いては葬法に一定の方向無く国府津雲等に於けるが如き耳飾の発見無き等より見て之を時代の古さによれる差異に帰するを以て穏当となす可きが如し[3]。而かも其の土器が一方に於いて隣接貝塚なる阿高のそれと相類し，他方に於いて河内国府，日向柏田等のものに相似たるものあり。関東貝塚式の土器と頗る相殊なるが如きものあるに注意す可く，又た紋様製作上に於いて弥生式土器と相接近せるものあるは，貝塚式土器と弥生式土器との製作者の同一を想像せしむるもの無きに非ず。たゞ此の問題は轟発掘の人骨の詳細なる調査成るの日を待ちて論究せらる可きものなるを以て，今は之を将来に留保することゝせり。（榊原，濱田）

【注】

（1）本報告第二冊第三章参照。

（2）日向国宮崎郡瓜生野村大字柏田貝塚土器は，大正八年一月濱田耕作，梅原末治発掘調査に拠る。

（3）肥後国下益城郡豊田村阿高貝塚発見土器は，大正五年三月熊本県庁発掘調査に拠る。（熊本県史蹟調査報告第一回参照）

性質／紋様	厚	色沢	硬度	吸湿性	底	縁	分量	其　他
（イ）隆起細帯紋	薄手	黝黒	硬	最弱	?	?	最多量	
（ロ）変様縄席紋	中等	褐色	硬	弱	?	?	微量	多く（イ）と共に施さる
（ハ）爪形及変様爪形紋	薄手・中等	黝黒	最硬・硬	最弱・弱	?		多量	河内国府土器類似
（ニ）波線直線紋	中等	黒褐色	柔	強	?		多量	弥生式土器類似
（ホ）各種直線紋	中等	黒褐色	硬	弱	?		多量	内に日向柏田貝塚土器類似のものあり
（ヘ）刷毛及篦目紋	中等・厚手	黒褐色	硬	弱			中量	
（ト）太形凹紋	最厚	褐色等	最硬・硬	弱	?		中量	肥後阿高貝塚土器酷似

（備考）他の紋様と共に施さるゝものは，其の主要なるものに摂し，独立して現はさるゝものゝ量を示す

（3）屈葬の頭位古き時代に於いて定まらざりしもの，後漸く確定するに至りしこと，伊太利青銅時代のNovilara(Porovince de Pesaro)の墓地に其の例あり。O.Monterius,La Civilisation primitive en Italie,(Stockholm,1910) Text,p.698.“Dans les tombes les plus anciennes, celles de Molaroni,I’orientation des enévelis est trèsvariée. Plus tard, dans les tombes de Servici, la direction du N. O. au S. E, avec la tête en N.O., devientla plus commune.Les corps étaient, généralment, places sur le cõté droit, les jambes pliées.”

（2）肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告

医学博士　清野　謙次

第一部　人骨の出土状態に就て

轟貝塚報告は余が津雲貝塚報告に比して甚だ簡単なるを免かれず。これ出土人骨数が乏しかりしため，及人骨附属遺物が単調なりしが為めなり。而て発掘人骨整理の都合上，研究報告を三分して，人骨出土状態のみを遺物出土篇と合せて発表する理由は，津雲貝塚発掘報告の冒頭に述べたるが如し。又貝輪の使用法等も津雲貝塚に於けると等しきが故に，改めて繰り返さず。

〔一〕人骨出土地層

人骨は轟貝塚発掘地図及別項轟村宮荘貝塚調査報告に明らかなるが如く，現存貝塚の東南突角（鈴木文太郎氏発掘地域）より西南乃至西方に亘れる，狭少なる地域より発見せられしのみなり。

地主前田利平氏等の口話によりて考ふるも，亦地形によりて判ずるも，余等が発掘地より南方及東方の地を掘り下げ，曽て水田となせし時には，多数の人骨を発掘せしものなるべく，人骨出土地の大部分は既に消滅し居りたるは遺憾なり。

発掘地域図（図版第三十六）によりて明らかなるが如く，人骨の分布状態は津雲貝塚等よりも著しく不規則なりしものゝ如く，諸例が列を成すの傾向乏しくのみならず，或地域にては密集し，又他の地域にては甚だ少数散在せるのみなり。

後表示すが如く，人骨は概ね現今の地表下二尺内外の地に在れど，所によりては一尺又は三尺余の深さに存す。而て多数例（十八例中の十例）にては，人骨は貝層最下部より貝層下有機土に亘りて存在し，発掘が進みて貝層が将に尽きんとする頃に，骨骼の一部が（多くの場合に於て膝関節部又は頭蓋骨）が現はるゝを常とせり。されど津雲貝塚に於けるよりも，比較的屢骨骸は浅層，即貝層中（十八例中三例）に存在し，又は反対に深層，即貝層下有機層中（十八例中五例）に存在す。従て轟貝塚に於ける人骨埋葬の深さは津雲貝塚よりも一定せざるものなり。

興味あるは第五号及第六号人骨の所見なり。第五号（女性）は全身骨の略完備せる座位屈葬にして其両腕には後述の如く，各一個宛の貝輪を挿入せり。全身は図版にて示せるが如く，貝層内に埋没せされ（貝層は此部に於て土壌を交ふること少なかりしにより骨表面は白し）腰部は貝層下部に達れり。第五号骨を除去せしに，骨盤及薦骨下より第六号（男性）の頭蓋骨が露出し，薦骨後面と頭蓋骨上面とは相距ること一寸に満たず。従て第五号は第六号の頭上に座せしものなり。

勿論斯かる場合には，第六号は第五号よりも古く埋葬せられたるものなり。而て津雲貝塚に於て類例を見るが如く，一度古く埋葬せし場所を，石器時代に於て，埋葬の目的にて再び発掘し此所に既埋葬骨の頭部が露出せしが為め，更らに深く発掘する事を中止して，第五号を上部に埋葬し了りしものなるべし。固より特別の事情ありて男女両体を故意にかゝる位置に埋葬せしこと無きには非らざる可し。

〔二〕人骨附属遺物

頭蓋骨又は骨骼間に石鏃，土器破片等の混入せしこと往々ありしも，こは貝層中のものと等しく人骨附属物とは看做し得ず。確なる例として，僅かに二例の前膊骨に貝輪の挿入を見し事なり。貝輪は津雲貝塚にて多数認むるが如く，モガヒ製のものなり。

第三号骨は頭部を欠けるものなりしが，右腕に一個の貝輪あり。貝輪後部（全形の約三分の一）のみ残存し，最狭部の幅は五分なり。形状は次例のものと等し。

第五号骨に着用せし貝輪の大さは次の如し。

単位ハ寸ニテ示ス	下入口部				高　サ	後部最狭幅	前部最広幅
	左右径		左右径	前後径			
右腕用	1.9	1.6	2.5	1.7	0.4－0.9	0.45	0.75
左腕用	1.8	1.7	2.6	1.7	0.4－0.7	0.45	0.65

両側貝輪は略同大なり。恐らく一顆の二枚貝より製作されたるものなるべし。甚だ大なる貝殻を使用して，其殻頂部に孔を穿ち，且貝殻腹側縁を擦り減らしたるものなるが故に，甚だ厚くして頑丈なるのみならず，津雲貝塚例と異なりて，前部と後部との幅の差乏し。従て形式が幾分異なれるのみならず，貝輪表面の研磨充分ならずして自然面を残せり。然のみならず，下入口部は貝輪製造時に孔を穿ち，然も入口縁の研磨充分ならざるにより，縁部に不規則なる凹凸を生ぜり。(図版第四十)

斯くの如く精巧ならざる貝輪は，津雲貝塚にては半製品として人骨を離れたる貝層中に発見するのみなり。津雲貝輪は菲薄精巧なり。轟貝塚は頑丈にして非美術的なり。人民の気質と文化の程度とを示すものと謂ふ可きか。

〔三〕人骨各部の相互的位置及人骨埋葬方位

地質の関係上轟貝塚発見人骨は甚だ脆し。発掘時には容易に破砕し，又発掘時以前に骨質に多数の破れ目を生じ居れり。骨盤脊椎骨体部等の海綿状骨は，発掘時中に屢小片に破砕し去れり。是れ極めて遺憾なる事なりき。

斯くの如き特殊事精あるにより轟人骨は津雲貝塚人骨の如く完全に地中より露出せしめて骨表面を洗滌せし後，撮影し得ざりき。余等が轟人骨の出土写真が不鮮明なりし理由なり。されば轟人骨にては，身体各部の位置を津雲例の如く，写真に対照し得ざるが故に，之を表示す可し。

〔備考第一〕第六号骨を除くの外は，上膊骨は肩関節にて強く屈曲して胸壁側部に沿ひて存在せるが故に，各例につきて一々記述せざりき。

〔備考第二〕肘関節を強く屈すと記せるは上膊骨と前膊骨とが鋭角を成せるを云ふ。弱く屈すとは直角以上の角度を成せるを云ふ。頸を強く屈すと云ふは身体の上半部が屈曲して顔面部が下を向けるを意味し，弱く屈すとは前下方を向けるを云ふ。膝関節を強く屈すと云ふは，大腿骨が脊柱に対して九十度以内に在るを意味し，弱く屈すと云ふは九十度以上百八十度以下なるを意味す。其他の関節の記述も之に倣ふ。

（注意）第九号乃至十五号は相接近して存し，四肢骨の何れに属せりや不明瞭なるもの多し。骨骼研究時には一括して示す可し。

上表に拠りて明らかなるが如く，轟人骨も津雲人骨と同じく屈位に埋葬せられたり。且多数例にては仰臥位なれども，二例に於ては横位，一列は座位に埋葬せられたり。埋葬時身体長軸の方向の判明せるもの十三例あり。此内，頭部を南方又は南方に近き方向とせるもの四例，南西とせるもの一例，北又は北に近きもの三例，西北に向けしもの二例，西に近くせしもの一例あり。津雲貝塚に於けると異なり，人骨の頭部方向が著しく乱雑にして各例大差あること明かなり。

焚火の跡は貝層内諸処に認む。津雲貝塚に於けると等しく，燔火の位置と個々死体との位置的関係は不定なり。又貝層内諸処より大小の自然石を出せしも，人骨と特殊の位置関係を認め得ず。又津雲貝塚に於けるが如く，骨の一部が特別の位置に存在し居りて，棺又は槨の存在を仮定せしむ可き現象に接せざりき。

番号	発掘月日	人骨の方向	性 (年齢)	地表より存在部位迄の深さ	葬位	身体各部の位置
第一号	十二月十七日	不明	成年	二尺七寸—三尺	不明	散乱せる不完全骨骼。
第二号	十二月十七日	不明	乳児	同前	不明	同上
第三号	十二月十七日	NE(頭)－SW	女 成年	三尺	仰臥屈葬	頭部なし。右上半身及右大腿のみ存す。右前膊部を弱く屈し。右手は胸部に存す。
第四号	十二月十九日	S(頭)－N	男 成年	一尺(貝層内に存す)	仰臥屈葬	頸部屈せず。両側前膊骨は肘関節にて直角に屈曲し前胸壁下部に存す。大腿骨は腰関節にて軽く屈曲し両側のもの平行に位置せり。膝関節は強屈曲。
第五号	十二月十九日	顔は南面す	女 成年	一尺五寸(貝層内に存す)	座位屈葬	頸部は軽く前屈。右側大腿骨は腰関節に於て強屈曲。左側大腿骨は凡そ直角を成せり。両側脛骨は膝関節に於て強く屈し，両足は座骨前に在り。肘関節は鋭角を成して屈し胸壁前面に於て左右上膊骨は交又せり
第六号	十二月二十日	NW(頭)－SE	男 成年	二尺五寸(貝層下に存す)	仰臥屈葬	頸部は屈曲せず。右側上膊骨は肩関節に於て外側に約直角をなして挙上せられたるも，肘関節に於て強く屈曲せるがため，右鎖骨下より右手骨を出す。左上膊骨は胸壁に沿ひて存在し，前膊骨は肘関節にて直角をなして屈せり。両側大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲し，両側のもの相平行して存す。脛部は膝関節に於て強く屈せり。
第七号	十二月二十日	不明	成年	二尺五寸(貝層下に存す)	仰臥	頭骨，肩胛骨，上肢骨等を存す。
第八号	十二月二十日	S(頭)－N	乳児	二尺	仰臥屈葬	散乱せる不完全骨骼。
第九号	十二月二十一日	NW(頭)－SE	成年	一尺五寸(貝層下に存す)	仰臥	頭部及脊柱等の一部分のみ存在せり。
第十号	十二月二十一日	SE(頭)－WN	成年 男	二尺	仰臥屈葬	頭部は前方に強屈。両側前膊骨は前胸壁上部に交又せり。下肢は体の右側に横倒れとなり。腰膝関節共に強く屈せり。
第十一号	十二月二十一日	NEE(頭)－SWW	成年 男？	二尺	仰臥屈葬	両側は近接して位置せるため詳細の状不明なり。されど下肢骨は強く屈せり。
第十二号	十二月二十一日	NNE(頭)－SSW	成年 女？	二尺	仰臥屈葬	
第十三号	十二月二十一日	SSE(頭)－NNW	成年 男？	二尺	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。両側手骨は前胸壁上に在り。大腿骨は左側に倒れ，腰関節に於て直角を成せり。膝関節は強屈。
第十四号	十二月二十一日	不明	乳児	二尺	仰臥	身体の一部分のみ存在す。
第十五号	十二月二十一日	S(頭)—N	成年 女？	二尺	仰臥屈葬	頸部は屈せず。前膊骨は胸に接して伸展せられたり。立て膝にして両側下肢は膝関節部にて相接して存す。脛骨は膝関節にて強屈曲。両側のもの近接して存し，足骨は座骨前に在り。
第十六号	十二月二十二日	NNW(頭)－SSE	成年 女？	三尺五寸(貝層下に存す)	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。右側前膊骨は胸壁上にあり。左側前膊骨は骨盤上に在り。腰関節は強屈。両側膝部は腹部に存す。膝関節は屈する事強し。
第十七号	十二月二十三日	NNW(頭)－SSE	成年 男	三尺五寸(貝層下に存す)	右側を下にせる横臥屈葬	頸部は強く前屈。両側前膊骨は肘関節に於て強屈曲。前胸壁上部に手骨あり。立て膝にして脛部を強く屈せり。両側下肢は膝関節に於て離れたれども，足部に於て相接せり。
第十八号	十二月二十三日	NE(頭)－SW	未成年者	二尺(貝層内に存す)	左側を下にせる横臥屈葬	両側肘関節を強く屈し，下顎骨前部より指骨現はる。両大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲。膝関節に強屈。両側下肢は相接して存す。

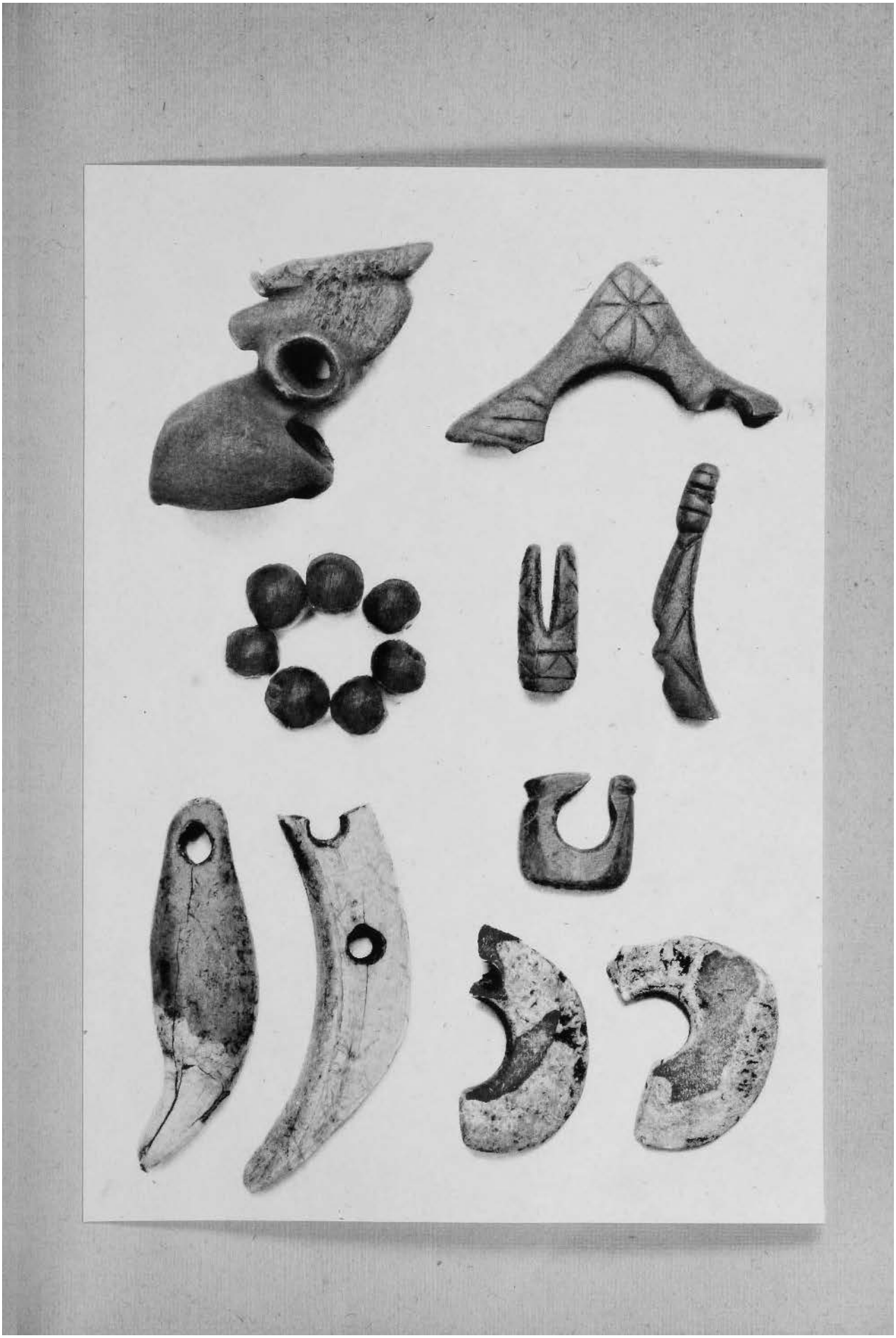
(注意)第九号乃至十五号は相接近して存し，四肢骨の何れに属せりや不明瞭なるもの多し。骨骼研究時には一括して示す可し

以上の所見に徴し，次の如く思考し得可し。即人骨の分布方向等の出土状態不規則なる点に於て轟人は津雲人よりも文化の度低し。而て貝輪の状態によりて明らかなるが如く，質実にして華美ならず。然れども骨骼の状態に就きて後報するが如く，又遺物篇の記載に拠りて明らかなるが如く，此両貝塚人骨は同一系統のものなり。両者の差異は数量的のものにして本態的のものに非らず。而て轟貝塚の文物が低級に在るは地方的差異あるか，又は時代的差異あるものなり。両者の孰れに重きを置く可きやは，更らに進みたる研究を要す可し。

〔**附記**〕 抜歯の風習に就きては第二部報告に詳説す可し。されど轟人骨にては（肥後国下益城郡阿高村貝塚人骨にても然りし如し）抜歯著明ならざりしに，津雲人骨にては盛んに此習俗行はれ，河内国府及尾張熱田人骨にては稀れに見るのみなり。此原因は何に基づくや熟考するを要す。

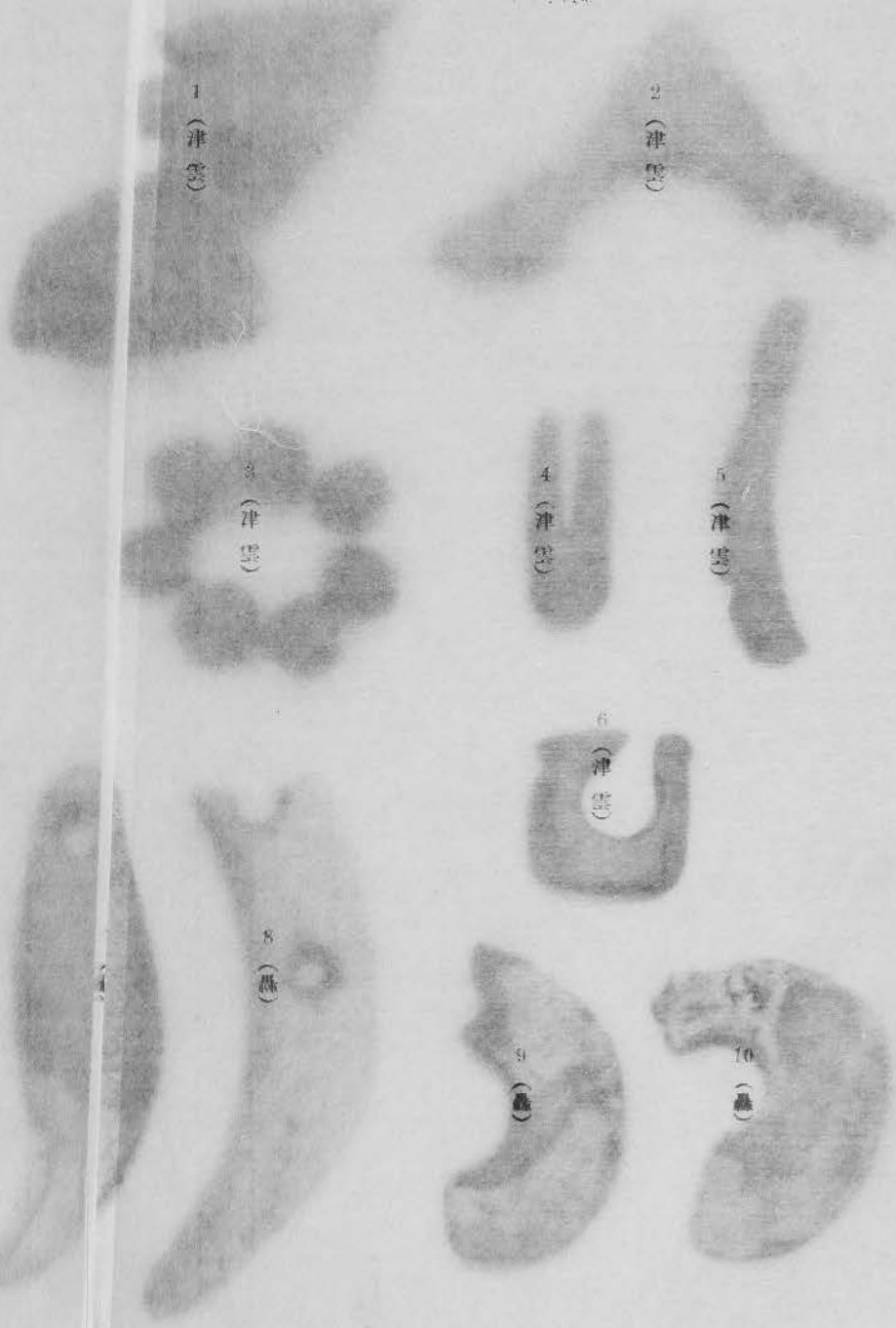
又琺瑯珠の出現が是等貝塚人骨に於いて，現代日本人ほど稀れならざりしことも，注意するの値あり。（大正九年二月下旬脱稿）

〔**附記一**〕 本報告書印刷中，大正九年七月東北帝国大学教授医学博士長谷部言人君は肥後轟貝塚の残余の一部を発掘し，人骨約二十体及び遺物若干を発見せられたり。就中注意す可きは，少数の弥生式土器破片を耕土層中に見出したると，骨器及石製耳飾の残闕二箇を得られたることなり，耳飾は白色大理石より成り，其の形式全く河内国府遺跡等より発見せられしものと相同じきを見るは最も重要なる事実となす。同君の発掘に関する詳細なる報告は，別に発表せらる可きを信ずるも，今ま同君の厚意により，此の新事実を附記し，耳飾は之を巻首図版中に挿入するを得たるは，余輩の深く喜ぶ処なり。（濱田）



Frontispiece, Tamo & Todoroki Shell-mound.

卷首圖版　津雲及轟貝塚發見裝飾品（一）



XXXIV, Todoroki Shell-mound.

圖版第三四　轟貝塚

1

轟貝塚全景

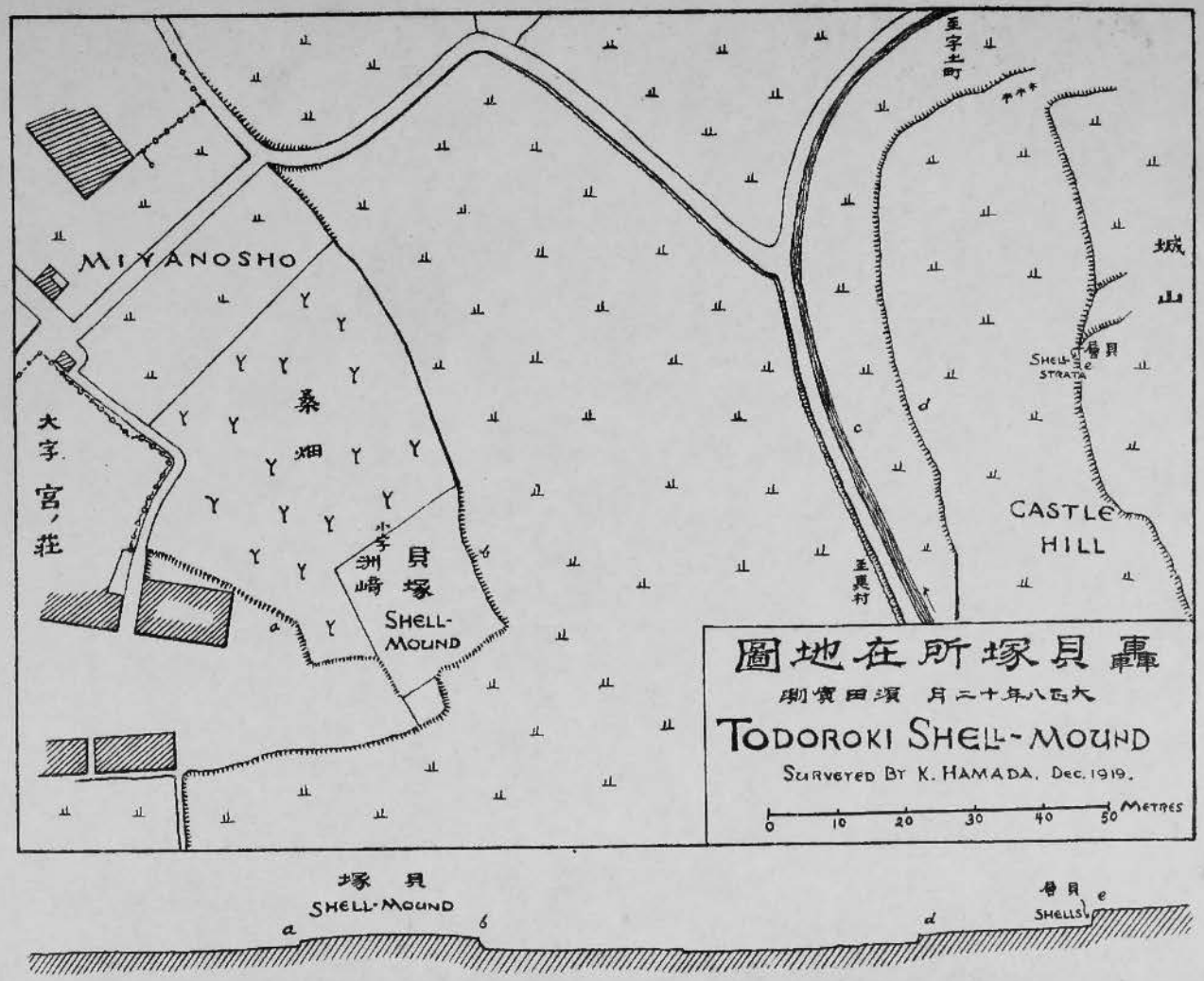
2

轟貝塚俯瞰

（矢線交叉點貝塚所在）

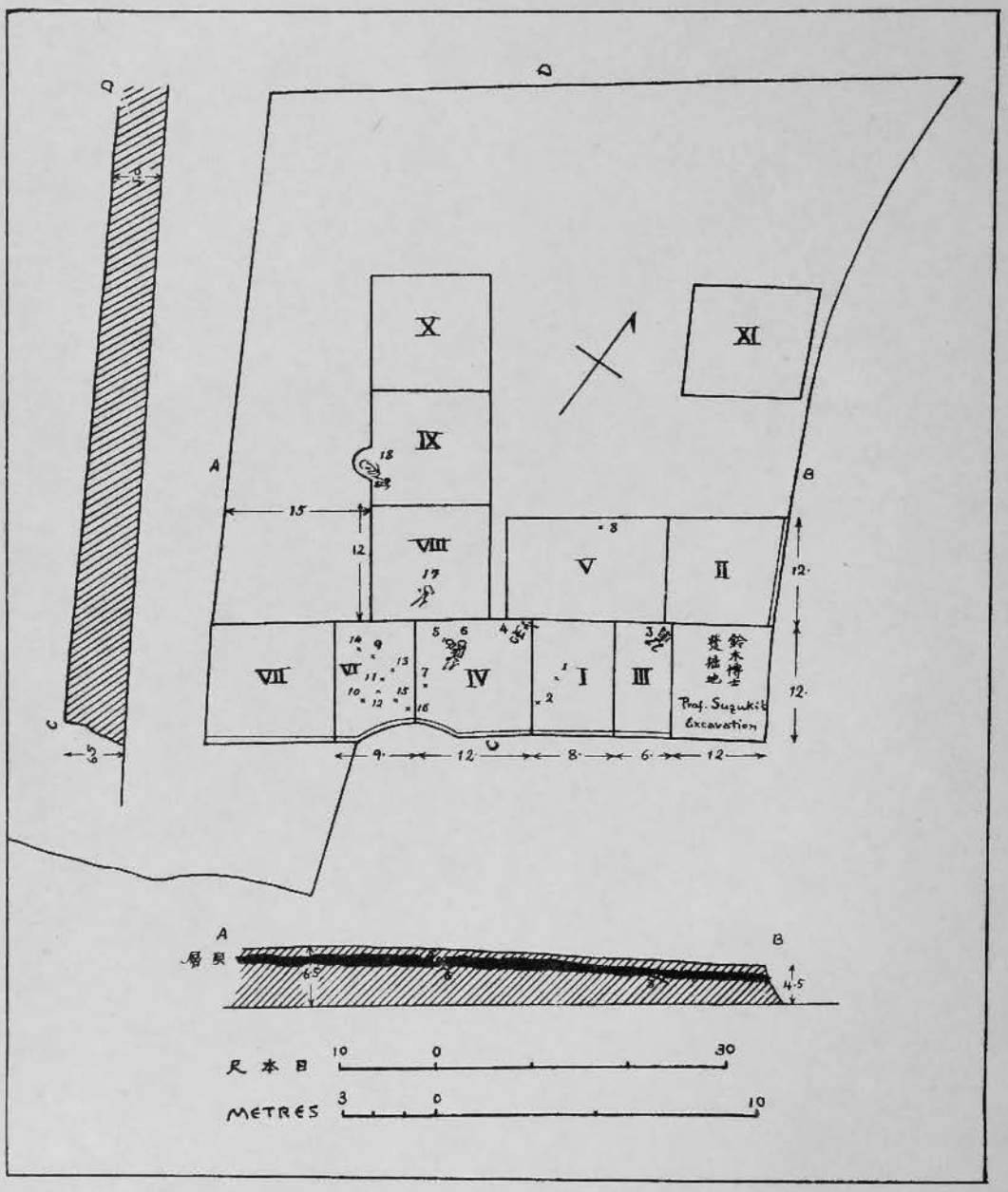
XXXV, Todoroki Shell-mound.

圖版第三五　轟貝塚



XXXVI, Todoroki Shell-mound.

圖版第三六　轟貝塚



轟貝塚發見人骨分布圖

XXXVII, Todoroki Shell-mound.

圖版第三七

轟貝塚

1

景光掘發

2

骨人號四第　　No. 4

3

骨人號六第　　No. 6

XXXVIII, Todoroki Shell-mound.

圖版第三八　轟貝塚

1

骨人　號四第　　No. 4

2

骨人　號六第　　No. 6

XXXIX, Todoroki Shell-mound.

圖版第三九　轟貝塚

第五號人骨　2　No. 5

第十七號人骨　1　No. 17

第十八號人骨　4　No 18

第九號乃至第十四號人骨　3　Nos. 9–14

XL, Todoroki Shell-mound.

圖版第四〇　轟貝塚

轟貝塚發見牙製裝飾品（½）

轟貝塚第五號人骨佩用貝輪（½）

轟貝塚發見石器

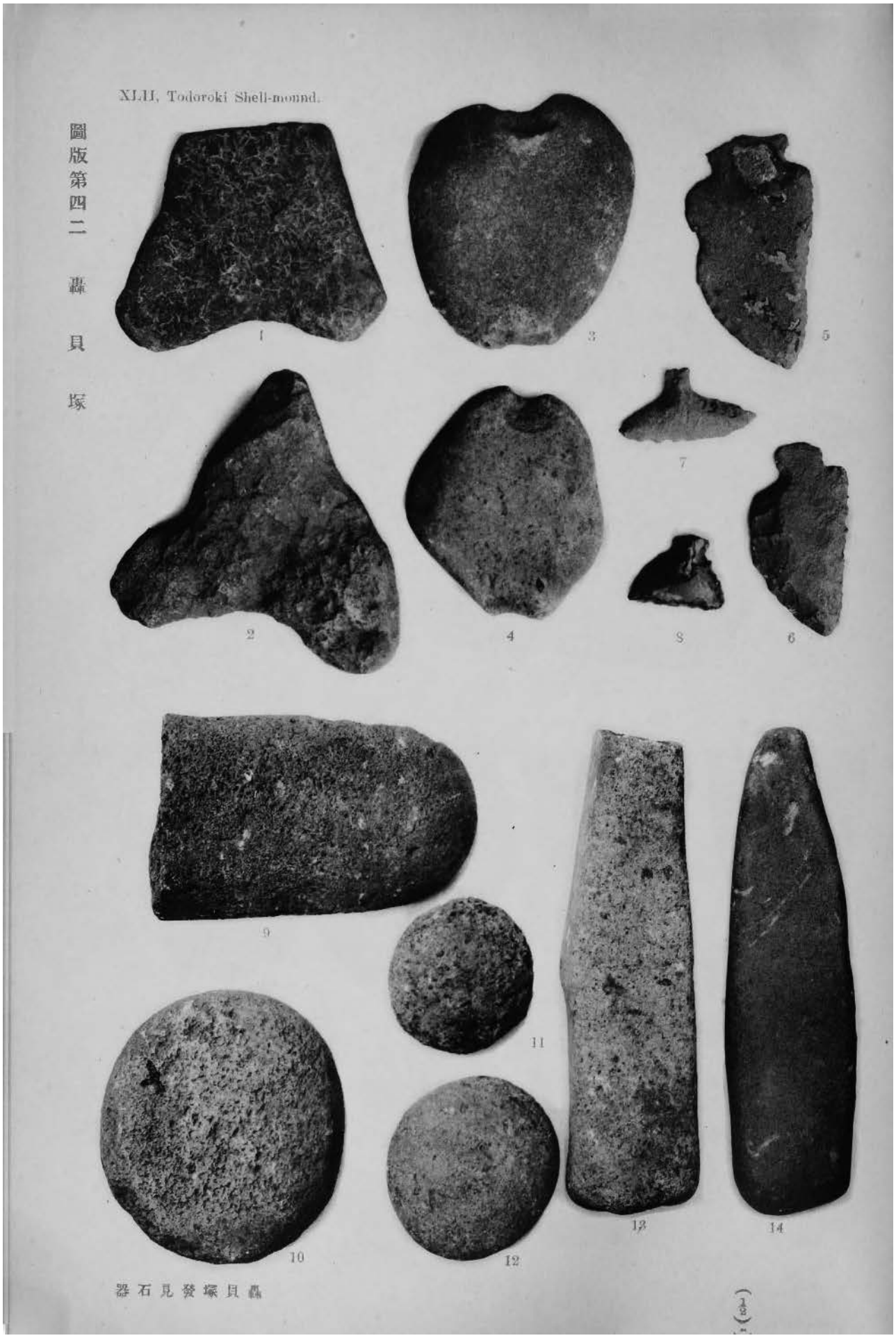
（½）

XLI, Todoroki Shell-mound.

圖版第四一　轟貝塚

轟貝塚發見磨製石斧（表面及斷面）

(½)


XLII, Todoroki Shell-mound.
圖版第四二　轟貝塚
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
轟貝塚發見石器
(½)

XLIII, Todoroki Shell-mound.

圖版第四三　轟貝塚

轟貝塚發見土器

(½)

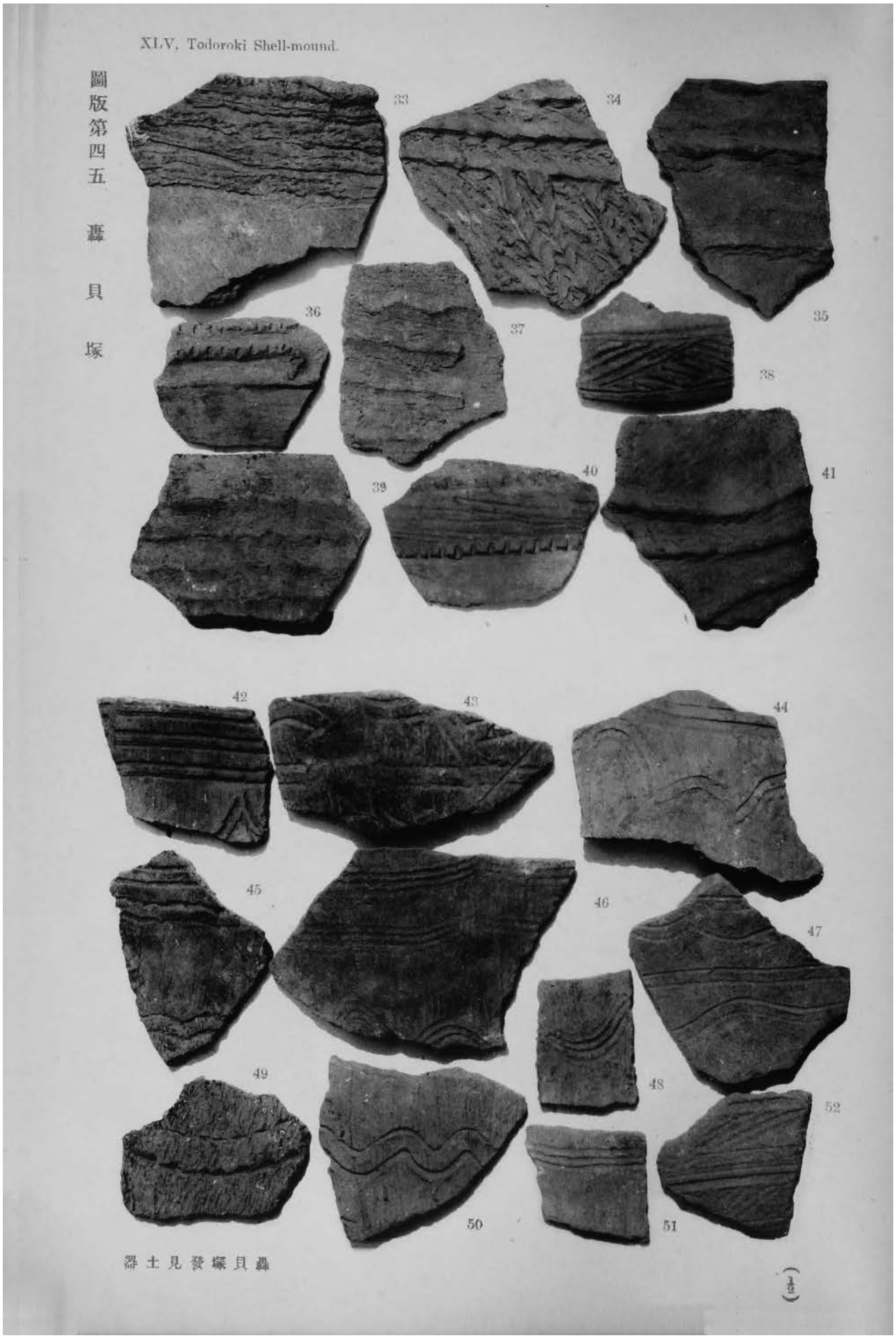
XLIV, Todoroki Shell-mound.

圖版第四四　轟貝塚

（土器上縁紋様）

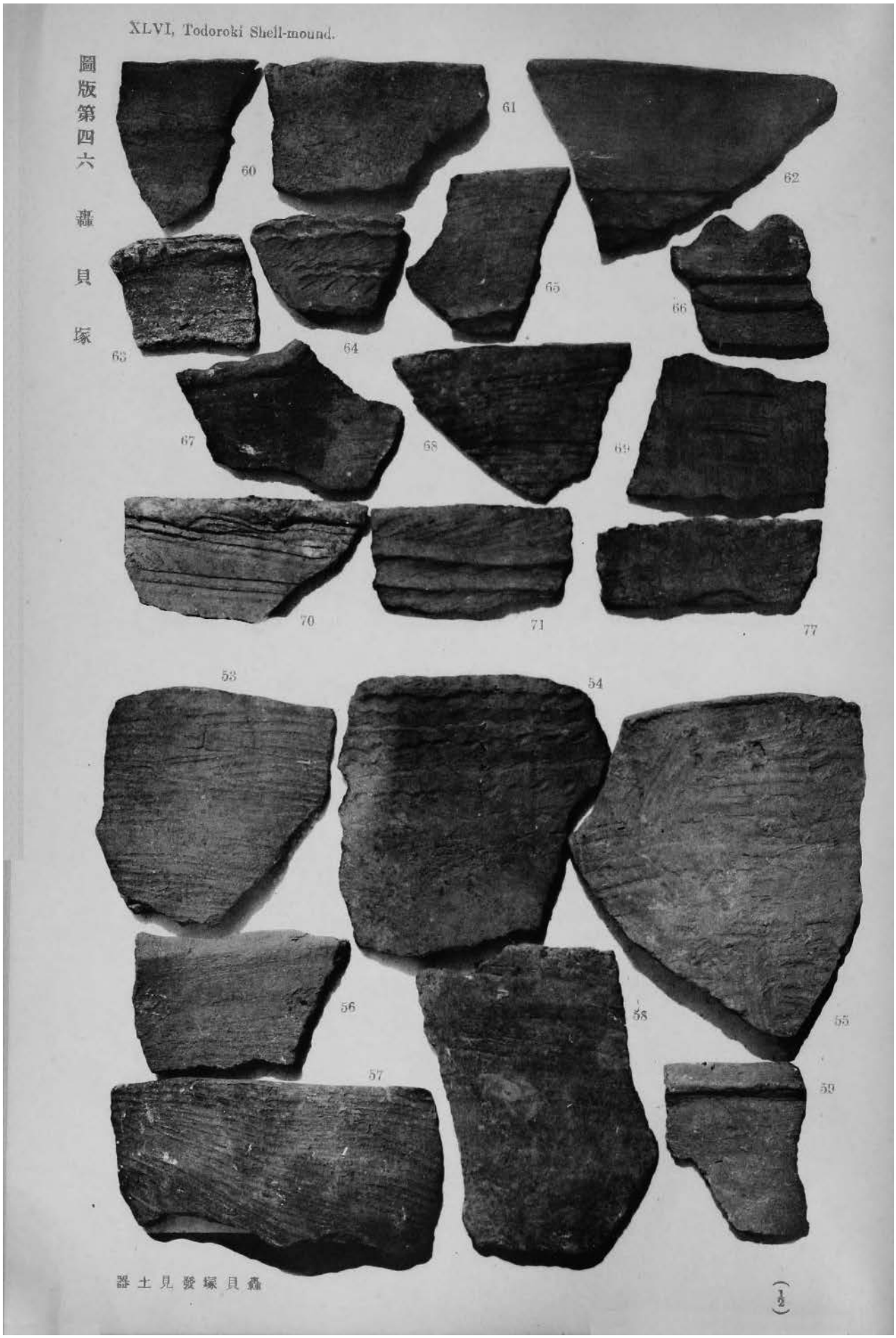
轟貝塚發見土器

（½）



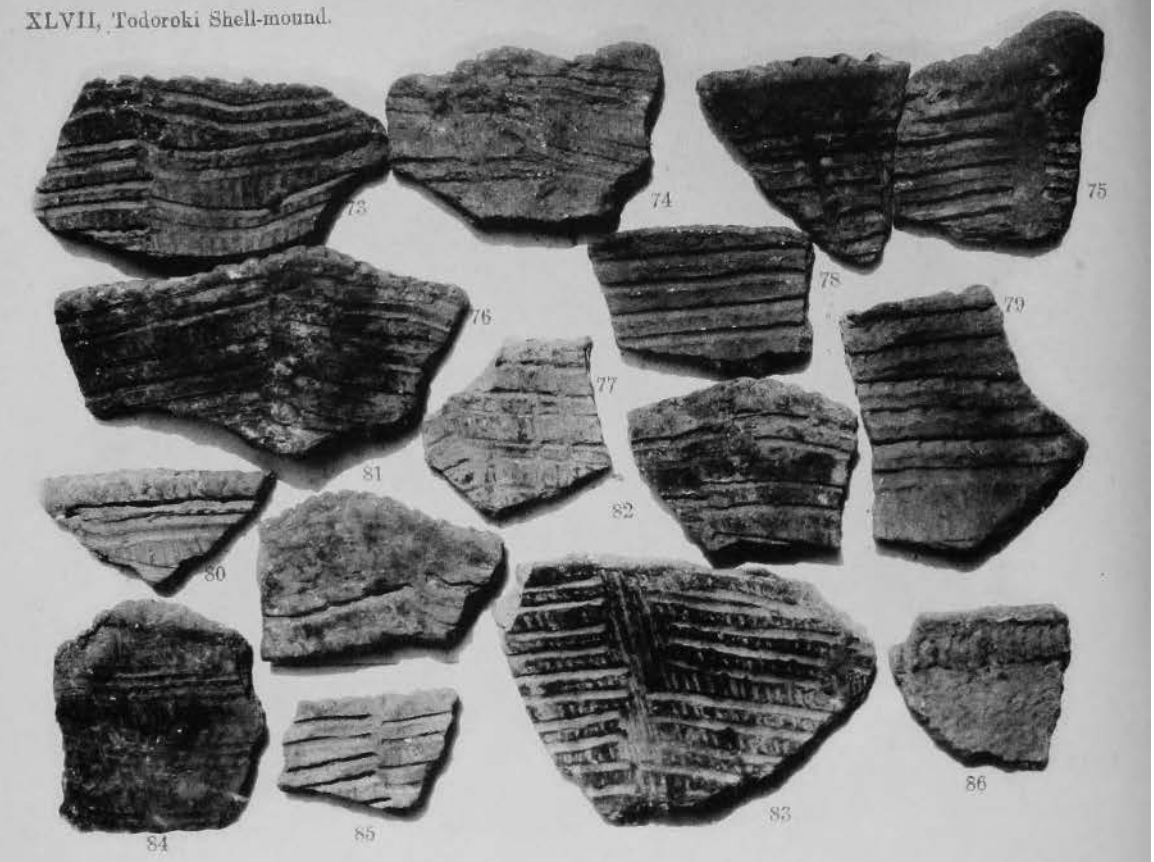
圖版第四五 轟貝塚

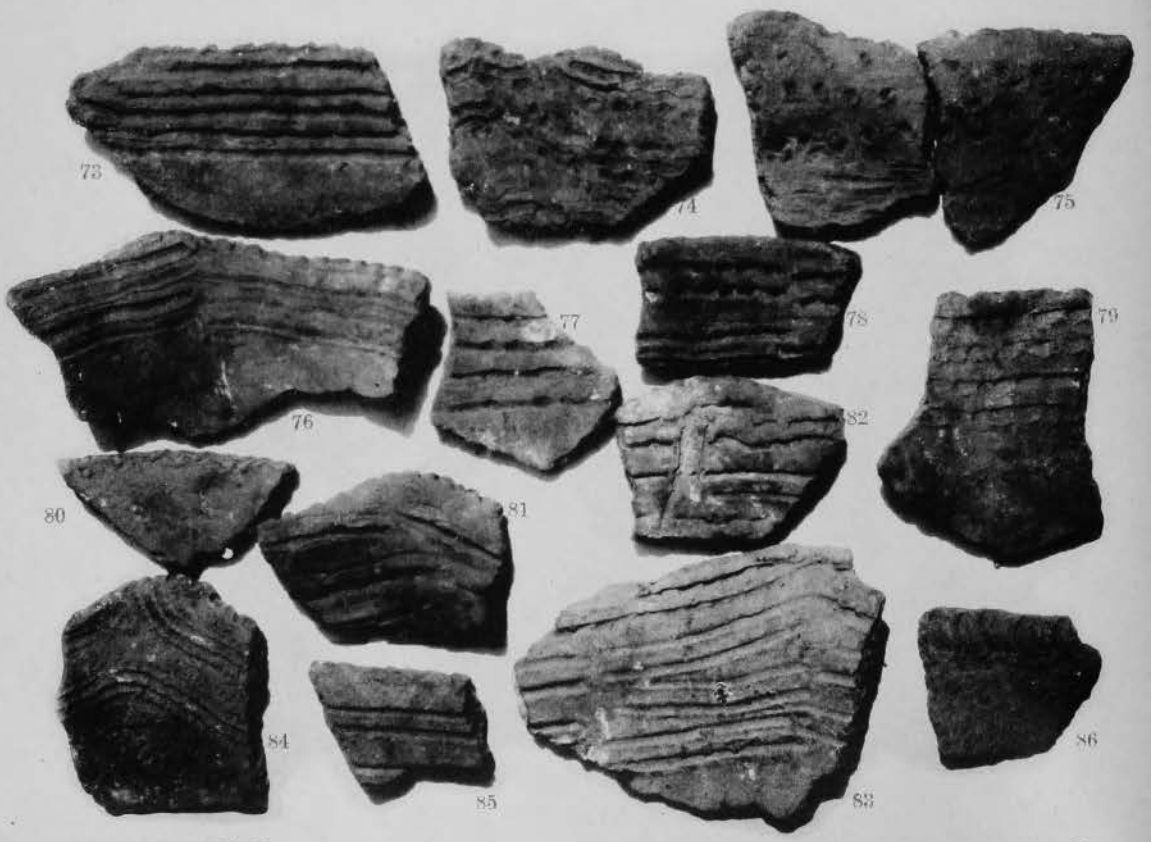
轟貝塚發見土器


XLVI, Todoroki Shell-mound.
圖版第四六　轟貝塚
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
77
53
54
55
56
57
58
59
轟貝塚發見土器
½

XLVII, Todoroki Shell-mound.

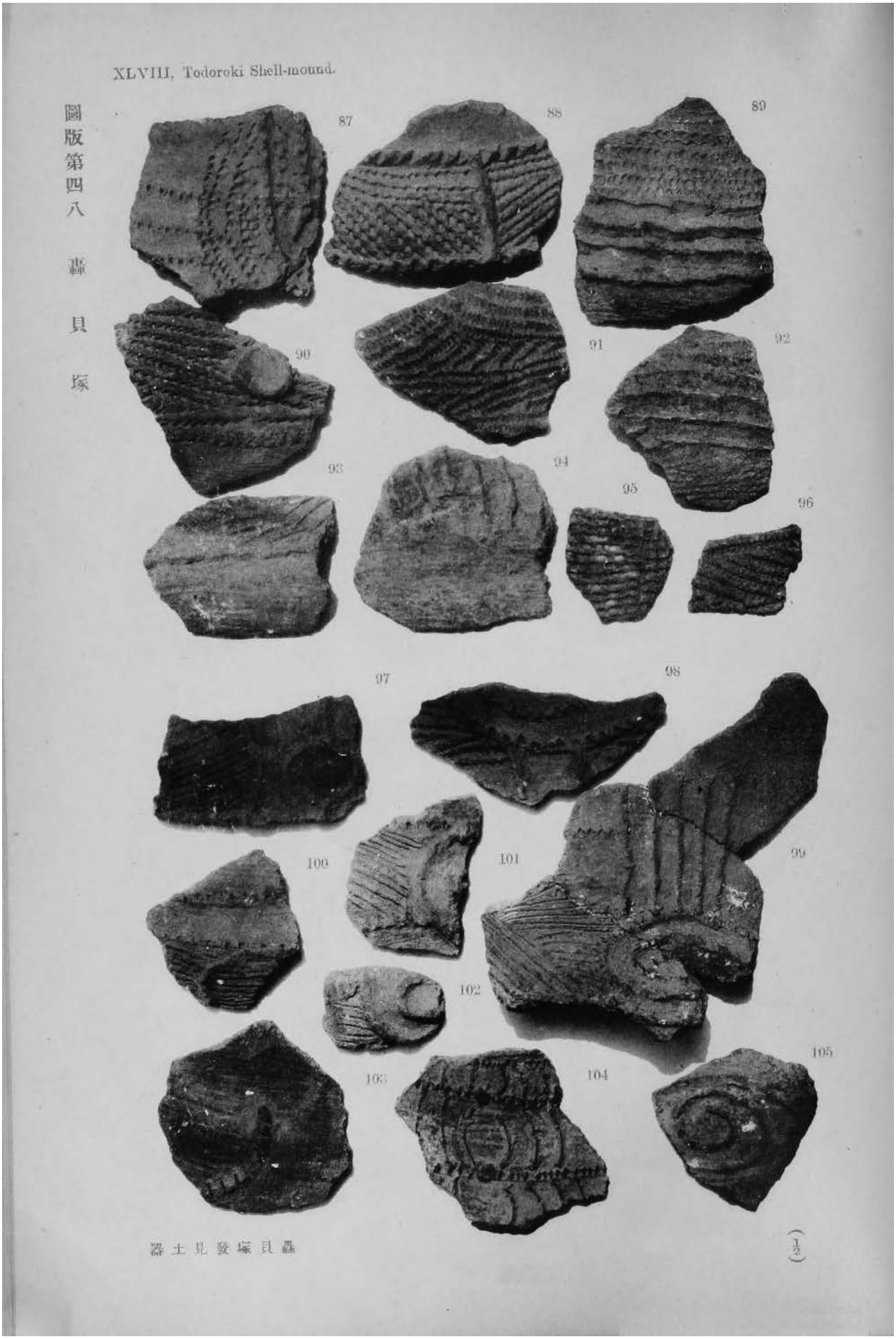
圖版第四七　轟貝塚

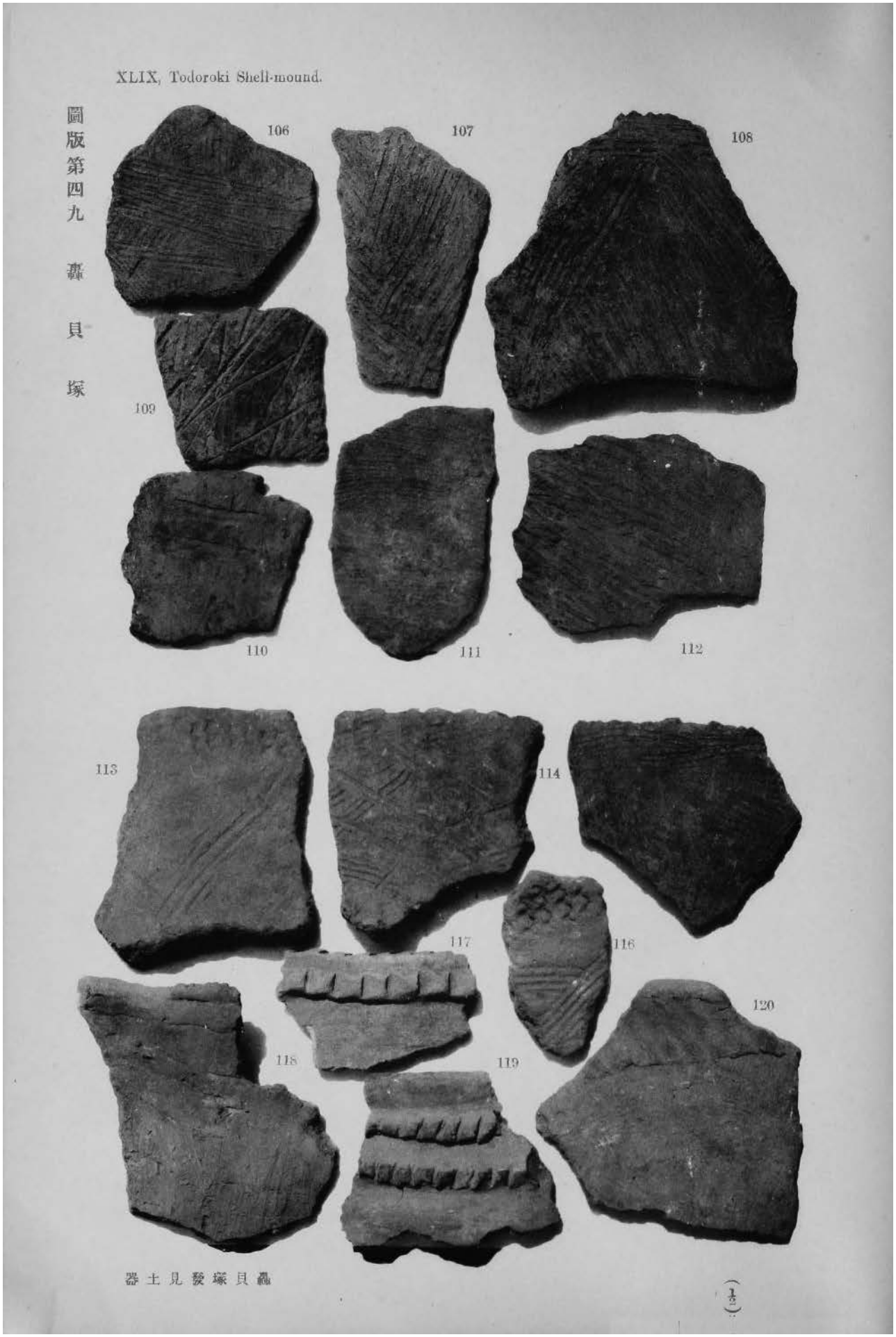




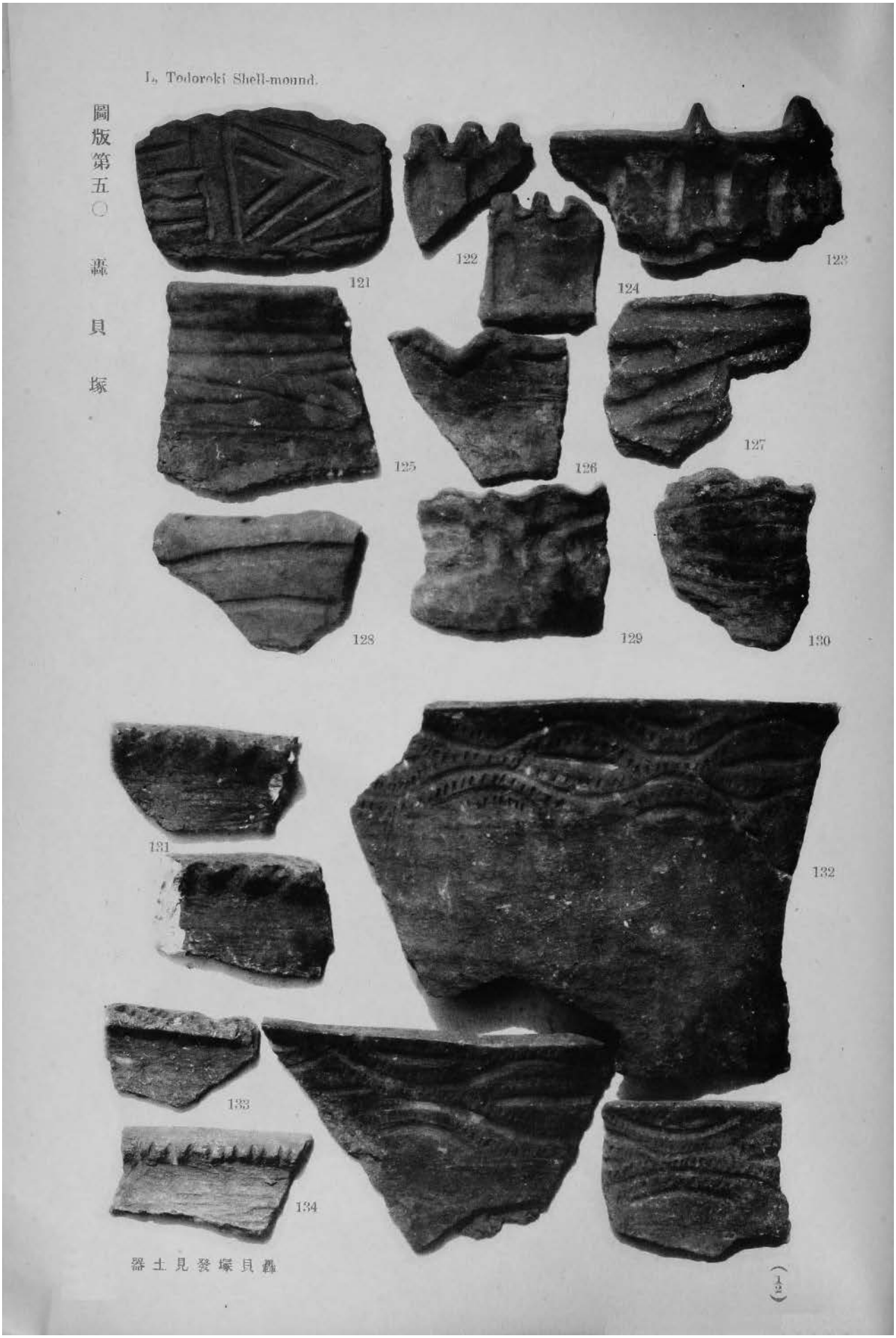
轟貝塚發見土器

(½)


XLVIII, Todoroki Shell-mound.
圖版第四八　轟貝塚
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
轟貝塚發見土器
1/2


XLIX, Todoroki Shell-mound.
圖版第四九 轟貝塚
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
117
118
119
120
(1/3)

轟貝塚發見土器

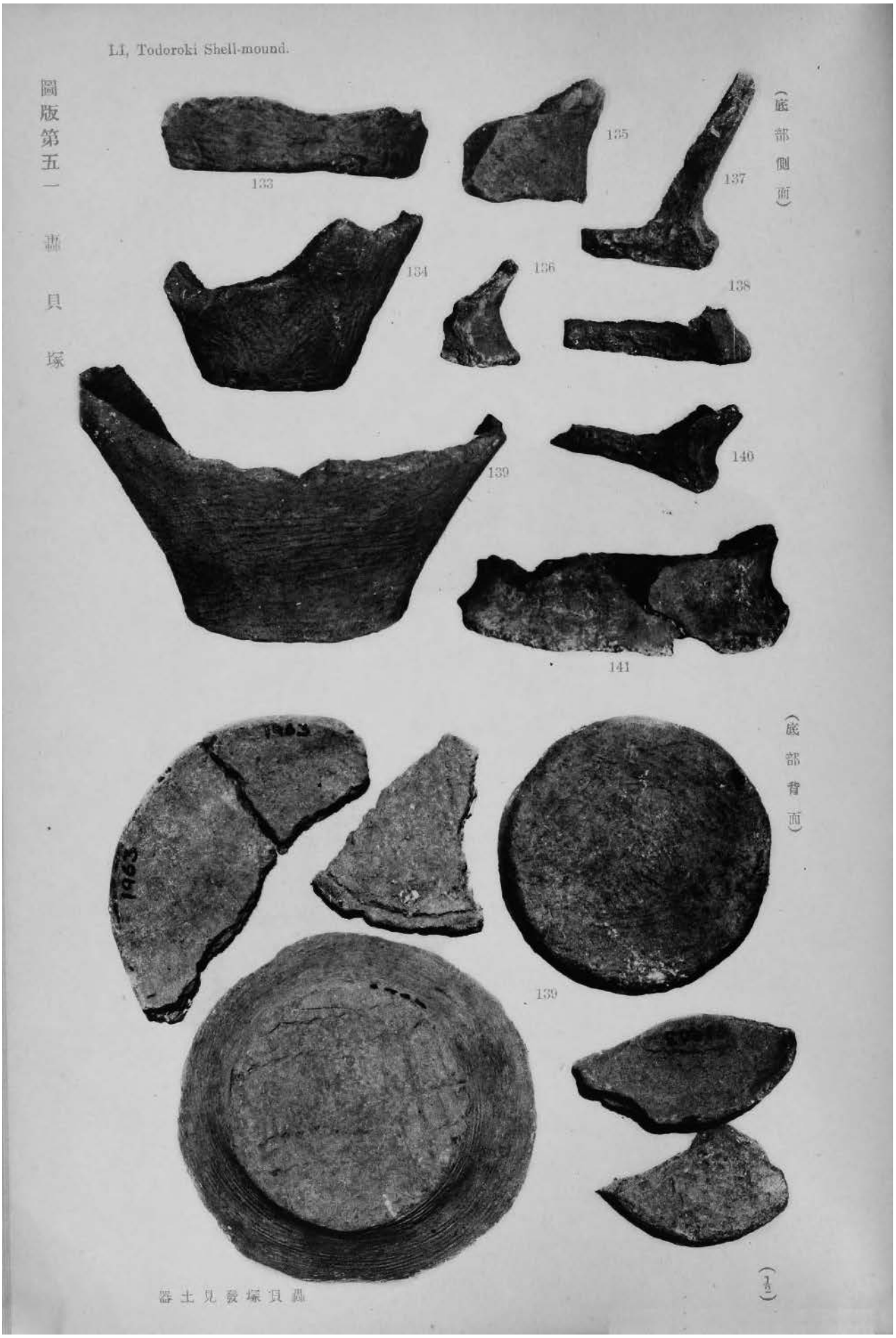


圖版第五〇　轟貝塚

轟貝塚發見土器

LI, Todoroki Shell-mound.

圖版第五一　轟貝塚



（底部側面）

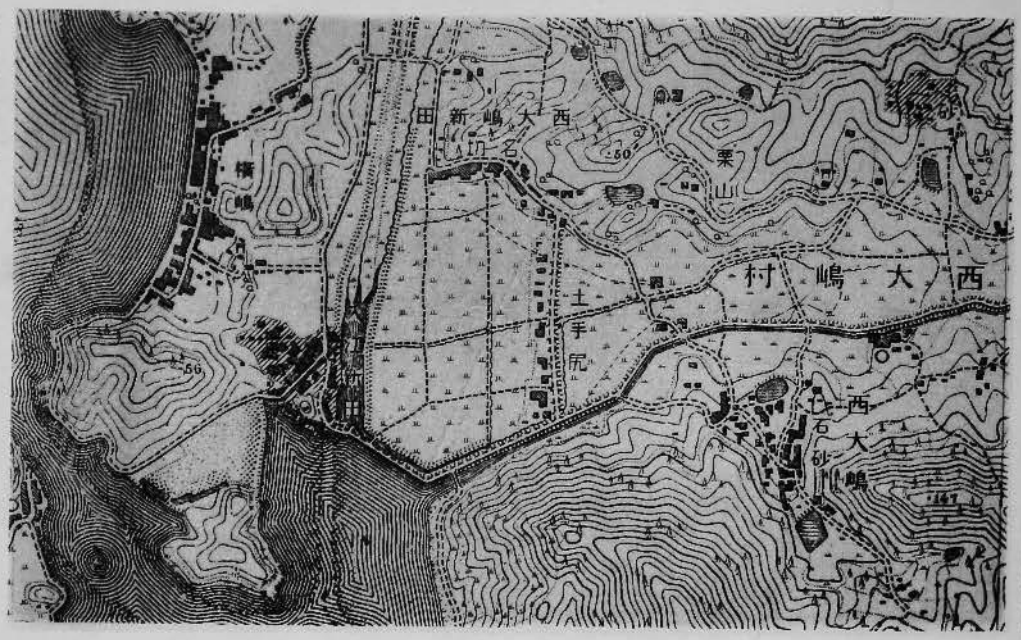
（底部背面）

轟貝塚發見土器

（½）

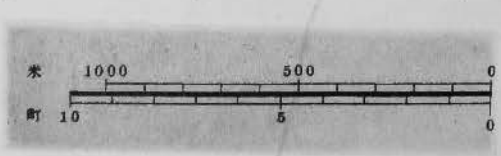
Map. Tsukuno & Todoroki.

卷末圖版　地圖



（陸地測量部二萬分一地形圖室岡號分載）

津雲貝塚附近地形圖

（陸地測量部二萬分一地形圖字土號分載）

轟貝塚附近地形圖